

こののをいふので、此時には熱が出たり或は戦慄が伴ふことが稀でない、此疼痛は右の上腹部の深部より起り、腹部全体に疼痛の放散するもので、此時には肝臓は腫上り、黄疸のある場合には黄疸が一層強くなる、疼痛発作は膽石が腸の方へ出て了ふか、或は膽囊へ逆戻りするに止むものである、又運の悪き時には膽石の爲に輸尿管が破れたり、或は輸尿管や輸尿管に化膿性の炎症が起つたりすることもあるのである、

膽石の養生は其痙攣発作の時と間歇時に分けねばならぬ、痙攣発作時には患者は全く食物を攝り得ぬこともあり、又醫師より絶食を命ぜなければならぬこともある、此發作の爲めに随分棘の疲勞衰弱を來すことのあるものであるから、發作はなるべく軽くすむ様に工夫せねばならぬ、其目的に用ひた薬品のため屢後に便秘の殘るものであるが、疼痛を止め而も頑固なる便秘を起さしめぬ様に薬品を使用する工夫ありやといへば、盲腸周囲炎の條下で述べたる如く確にあるのである、此痙攣発作が餘り高度でなき場合には、脂肪に乏しき消化し易き流動性の食品を少量宛回数多くに分けて用ふるがよろしい、發作間歇時には成るべく膽汁の排泄を計り且又患者の体力を落ちさせぬ様に、營養分に富みたる飲食物を與へねばならぬのであるが、本病には必ずしも黄疸が常存するにも限らず、又黄疸があればとて膽汁が全く腸内に流れ入らぬといふ次第でもないのが多いから、牛乳や粥を重なる食品として、餘り脂肪濃きものでなければ動物性食品も植物性食品も同じ、流動性或は半流動性或は半固形に料理し、且つ味美くなし、品物を取換へて、飽かさぬ様に少量宛回数多く取る方針にせねばならぬ、又水分を多く用ふることも別に膽汁は稀薄くはならぬが、之が腸内に流入することは容易なるものである、随つて流動性食物の他に飲料を用ひてよい、

又膽汁の分泌も本来必要に應じて起るものであるから、其分泌を促すべき性質の食品を割合度々且大量に與へてよい、即ちオリーブ油、肝油、牛酪等を多く用ふるがよいといふ治療家もあるのであるが、元來膽石病には食慾の落ちて居る患者が多いから此方法は實行が困難である、

膽石病には終始糖類下劑を用ひて貰ふのがよい、然し下劑は身體を麻痺せしむるものであるから、食養生に缺くる所があつては甚だしく身體を衰弱せしむるから餘程注意を要するのである、刺激性の香味料及酒類を用ひてはならぬことは他の肝臓病におけると同じく、茶や礦泉などは用ひてよし、夜睡眠前に牛乳や流動性にしたる輕き植物性の食品を用ふることは寧ろ御勤めする、果物のスープ、果物のゼリー時々生の果物を用ひ、便秘を助くる心掛けもあつてよろしい、

本病では肝臓が始め少く大きくなり後縮少して硬くなり、腹に水が溜り、次いで脚にも浮腫が来り、食欲が減じ身體は衰弱するもので、高度になつたものは養生も治療も困難であるから早くより適當の養生法を守り、病氣が高度にならぬ豫防せねばなりません、元來腸や胃や腹部の内臓の毛細管が相集つて少血管となり小血管が又相集つて太き一本の血管となりて肝臓内に進入し、再び肝臓内で小血管に分れ更に枝別して毛細管となり、復次第に小血管に集り、小血管が互ひに集まつて肝臓を出るもので、それ迄を門脈系統といふのである、肝臓を出る時には三四本となつて居るので、之を肝靜脈と名付け上行大靜脈に合し、其中を流るゝ血液は心臓に還るのである、本病では此肝臓内の小血管及び毛細管の周圍に結締織が澤山に出来るので、此結締織が收縮すると肝臓が小さくなるのである、又肝臓が小さくなる時期には、肝臓内の毛細管が幾部分か荒蕪せられるので、門脈系統の血液の流通が悪くなり、腹部内臓に血液が滯つて、腹腔内には腹水がにじみ出で、膈や胃の内面には浮腫が起る様になるので、自然食欲迄落つる様になるのである、とこゝで酒類や胡椒、山椒、山葵、蕃椒、芥子、蓼及び鹹きもの其他辛辣なる香料を常用して居ると之が門脈系統に吸收せられ肝臓に至りて害をなし、本病を起す様になるもの

であるから、本病の養生には此等のものは一切禁ぜねばならぬ、然し非常に酒類を多量に用ひて居る酒客に突然酒を禁じると急に脱力を起すことがあるから、酒類だけは漸次に制限する方針を取らねばならぬ、本病には黄疸が起ることは甚だ稀ではあるが、膈内における脂肪の消化は割合害せられて居るから脂肪濃きものは避けねばならぬ、總体本病に罹れるものは淡白なる植物性食品を望むものである、が、前に述べたる通りに胃腸の粘膜に鬱血があるから、不消化なる植物性食品は胃腸が堪へ得ぬから、成るべく消化し易きものを選び、或は消化し易き様に料理せねばならぬ、然し植物性食品のみにては體力を補ふに足らぬから、其足らざる所は牛乳にて補ふがよい、又患者が望むならば脂肪濃くない魚肉、獸肉を適當に消化し易く且つ美味に料理して用ひてよい、然し餘り甘味を強くしてはならぬ、果物を適當に料理したるものも用ひて差支ありません、

第五節 心臟病

心臟は左の乳房の下に當る胸内に在つて、大きさは僅かに手拳大であるが、それで全身到處に血液を送つて、營養分を總ての組織に與へ、再び其一度使はれて古くなつた血液を

全身より吸ひ集める大役を盡して居るのみならず、其役を果すうちにも、胃や腸では養分を血液中に吸ひ取らせ、肺臓では酸素を輸入し、尙腸からの養分就中脂肪を集める乳糜管、其相集まりて胸管となりしものよりは乳糜を吸ひ入れ、全身より集まつて来る淋巴液を淋巴管より吸入して居る、凡て一度組織内に這入る液体は是非共心臓が汲み入れ、汲み出さねばならぬので、此作用で遂に全身の末の末まで司配して居るのである、丁度唧筒の様に働いて居るのであつて、其働きは人により長幼男女により異つては居るか、中年の男子では一分間に約七十回收縮と開張を營んで居る、其收縮する時に血液を送出させて全身に行き渡らせ、其開張するときに全身から血液を是非一應自分の處へ歸り來らしめ、更に全身に向つて放出するもので、之がために全身の血液は絶えず巡環して止むなきものである、であるから唧筒でも誠に巧妙に出來て居るもので、人間の造つた唧筒などは比較にならない、處で心臓も働いて居るばかりでは疲れて敗れてしまふ、是非自分も養はれて力をつけられねばならぬから、自家血管で冠狀動脈と云ふのがあつて、心臓の筋肉やら辨膜やらを養ひ、それで使ひ古された血液は冠狀靜脈を通じて心臓自家の内に歸る様になつて居る、随つて心臓の病氣では心臓筋肉の病、心臓辨膜の病なき、共に、此冠狀動脈の病は實に重大のものである、そこで心臓は自分が達者の時ばかりでなく、よし病氣になつた時

でも一刻も休息することは出來ず、他の臟腑の休んで居る時も晝も夜も間斷なく、人間が初聲を擧げてより愈の斷末間まで一貫して働らかねばならぬ職責を持つて居るので、これ程高貴な唧筒は他に一もないのである、それで大切にして亂用さへせねば、何十年或は百年の上までも使用に堪へるので、かやうに丈夫な機械は他にはありません、で、酒かほぎ大切なるものであるから、其養生は最も重要なことは申す迄もありません、で、酒や煙草の濫用は非常に心臓を害する、又芥子や蕃椒の如き強き香味料を常用して居ることも同じく早く心臓を傷める、又間違つた食養生をして居つて營養物が足らぬと、心臓筋肉の萎縮や變質を起すやうになり、營養物が多きに過ぎても筋肉間の組織に脂肪が沈着したり、或は心臓を包んで居る心臓外膜の組織にも脂肪が堆積したりして、恰も唧筒の動かねばならぬ部分に重石を掛けたやうになることもある、此最後のものが所謂脂肪心臓と云ふ状態である、又過度の贅澤食をして居ると多血質になつて全身は肥満し殊に脂肪肥満を起し且血液の量も多くなるから心臓は餘計に動かねばならぬやうになり疲れ易くなる、總じて心臓の動作は萬遍にどこから何處迄も十分血液を送らねばならぬと云ふ全身の原動力であるから身体が不權衡に大きくなつても重くなつても其れだけ多く働らかねばならぬのである、多血質と云ふと今のやうに血液の性質が良い場合ばかりでなく、血液が悪くなつても

多血質になることもあるので、之は心臓が疲労して腎臓に都合よく血液を送らぬと、腎臓の動作が衰へ身軀に不要になつた水分を尿として出す力が減じ、血液中に水分が滯り、猶腎臓から体外に出るべき不要の廢物も血液の中に残り血液は悪くなる、かやうに悪くなつた血液が身体を巡ると、血の管の營養が悪くなり、血管は自分の本分を盡すことが不十分になる、即ち組織に營養分を與へ組織より不用物を受け取るものが不十分になり、且血管より外に水分が遠慮なく出で、血管外の組織は營養が悪くなるの、弾力性が減するの、で、淋巴液が心臓に歸流することが六つか敷くなる、其結果は身体所々に浮腫となつて現れる、此浮腫が現れる迄にならぬとも、全身の血量が水分に富んで量が多くなり、心臓は之を汲み入れ汲み出さねばならぬから疲労し易くなる、之が即ち假性多血質と名づける状態に誠心臓に不利益なのである、

全身の血液は各人一定の量であつて、若し飲食物により一時突然多量（一時性多血質）となつても心臓が壯健であれば其時々必要に応じて或は強く或は數多く働らいて腎臓の方へ送り、腎臓は餘分だけの水分を尿として體外に出し、常に平均を保つて居るものであるが、若し心臓或は腎臓が疲労するやうになると、前に述べた假性多血質（或は眞性多血質）となるもので、之になると亦心臓や腎臓を疲労さすやうになり、互に因となり果とな

るのである、

又心臓は平素全力を出して働らいて居るのではない、其八分目の力で働らいて居るのであつて、まだ働らけばもう少し働らける云ふ餘力を保存して居るのである、此餘力があればこそ急に餘計働らかねばならぬことが出来ても、其れに應ずることが出来る、急に疾走しても急に平生より身体を労働させても、一時は之に堪ふことが出来る、之を健康人における代償機能と云ふのである、心臓病の時に一旦心臓が疲れて働作が出来なくなつた時次第に心臓の筋肉が肥大し心臓の内腔も心臓全体も大きくなつて、前だけの働作の出来る様になるのを醫師は心臓の代償機能と名づけて居るが、實は病氣の時ばかりではなく、健康時にも代償機能と云ふのがるのである、病氣の時でも健康の時でも此以上に心臓の働作を要求することが起り、心臓が之に應じきれぬ様になる、心臓の筋肉は弛緩し心臓は脱力して其作用は歇むので、之を開張期の麻痺と云ふのである、健康人でも過度の労働又は激烈な競争なきの時に斃れることのあるのは之である、故に健康者も病人も此代償機能が十分に營まれることの出来るやうに平素から養生をして置かねばならぬのである、

肉體であつても精神であつても過度に働らかすと心臓に害のあるものであつて、肉體に就ては代償機を失はしむるので明白であるが、精神も又大影響あることに就て一二の例を舉

けて見やう、
 嘗て米國に於て或學者が死刑囚に目隠しをなし、肉体に刀を觸れたのみで今切つたぞと云ひ、傍より水瓶を用ひて水を滴らし、恰も傷より流れ出る如く思はせ、一合出血した五合出血したなき、話し、「出血は全血量の半に至れば危険であり三分の二に至らば死に致す」を説き、今現に其點に來れりなき、云ひ、試験をした見たのに、其瞬間に囚人は倒れて死んだと云ふことである、又本邦で或知名の醫師が某肋膜炎患者の胸の水を試験穿刺によつて検査しやうとした、其時患者は甚だ恐怖して其れを行ふては死ぬるやう思ふ故中止して呉れと頼んだ、無論此穿刺は元來何の危険もないものであるが、其醫師は患者に猶十分得心が出來ぬ内に叱りつけて穿刺をした、それと共に患者は卒倒して蘇生せなんだことがある、此二例によつても精神を過度に苦しめることは心臟に大なる害のあることは明白であらう、
 假令肉體や精神を過度に使用せずとも、不規則に使用すると云ふことは心臟に害を及すもので、心臟病患者で試験して見るに不規則の動作をした後には、心動も平調を失ひ尿利迄減するものである、又不規則に精神を使用した場合、例へば感情の變動位でも心悸亢進の起る如く、肉體や精神を過度に勞働させたり或は不規則に使用すると云ふことは養生上避けねばならぬことである、
 心臟は亦他の病氣例へば肺や、肋膜炎の病氣、或は腦や、脊髄や、腎臓や、胃腸の病氣或いは腹膜炎の病氣、或ひは熱病なきの爲め衰弱を來すことがあるのを知つて居らねばならぬ、就中熱病の時には熱其物だけでも心臟が弱り、或ひは熱病の原因たる微菌の作りたる毒素の爲め心臟が害せられるものである、又腹部より起る腹痛の爲めに反射性に心臟が弱ること甚だ多いことを心に留めて置かねばならぬ、此等の場合には開張期に限らず收縮期にでも麻痺を起すことがある、
 腹部の疾病で心臟が弱るのは腹痛の爲めに心動が停止せんとする如き感覺の起るので明白なる通り健康人でも不意に腹を擲られた時とか、又病氣では胃腸の痙攣、膽石症痛、腹膜炎の腹痛の時に脈や心臟の状態を見れば明白であるが、疼痛迄でなくとも食物の爲め腹部の膨滿を感じた時にも、胸に壓し迫るやうに覺れ、心臟に不快を感ぜしむるものであるから、養生上此點に注意せねばなりません、
 飲食物と心臟とは密接の關係あることは前に述べたが、之が尿中に出て來る水分の量によつて更に明白になつて來る、元來健康人では飲食物中の水分の量より一割八歩乃至三割二歩だけ減じたと同じ尿量が出る、

けて見やう、
 嘗て米國に於て或學者が死刑囚に目隠しをなし、肉体に刀を觸れたのみで今切つたぞと云ひ、傍より水瓶を用ひて水を滴らし、恰も傷より流れ出る如く思はせ、一合出血した五合出血したなき、話し、「出血は全血量の半に至れば危険であり三分の二に至らば死に致す」を説き、今現に其點に來れりなき、云ひ、試験をした見たのに、其瞬間に囚人は倒れて死んだと云ふことである、又本邦で或知名の醫師が某肋膜炎患者の胸の水を試験穿刺によつて検査しやうとした、其時患者は甚だ恐怖して其れを行ふては死ぬるやう思ふ故中止して呉れと頼んだ、無論此穿刺は元來何の危険もないものであるが、其醫師は患者に猶十分得心が出來ぬ内に叱りつけて穿刺をした、それと共に患者は卒倒して蘇生せなんだことがある、此二例によつても精神を過度に苦しめることは心臟に大なる害のあることは明白であらう、
 假令肉體や精神を過度に使用せずとも、不規則に使用すると云ふことは心臟に害を及すもので、心臟病患者で試験して見るに不規則の動作をした後には、心動も平調を失ひ尿利迄減するものである、又不規則に精神を使用した場合、例へば感情の變動位でも心悸亢進の起る如く、肉體や精神を過度に勞働させたり或は不規則に使用すると云ふことは養生上避けねばならぬことである、
 心臟は亦他の病氣例へば肺や、肋膜炎の病氣、或は腦や、脊髄や、腎臓や、胃腸の病氣或いは腹膜炎の病氣、或ひは熱病なきの爲め衰弱を來すことがあるのを知つて居らねばならぬ、就中熱病の時には熱其物だけでも心臟が弱り、或ひは熱病の原因たる微菌の作りたる毒素の爲め心臟が害せられるものである、又腹部より起る腹痛の爲めに反射性に心臟が弱ること甚だ多いことを心に留めて置かねばならぬ、此等の場合には開張期に限らず收縮期にでも麻痺を起すことがある、
 腹部の疾病で心臟が弱るのは腹痛の爲めに心動が停止せんとする如き感覺の起るので明白なる通り健康人でも不意に腹を擲られた時とか、又病氣では胃腸の痙攣、膽石症痛、腹膜炎の腹痛の時に脈や心臟の状態を見れば明白であるが、疼痛迄でなくとも食物の爲め腹部の膨滿を感じた時にも、胸に壓し迫るやうに覺れ、心臟に不快を感ぜしむるものであるから、養生上此點に注意せねばなりません、
 飲食物と心臟とは密接の關係あることは前に述べたが、之が尿中に出て來る水分の量によつて更に明白になつて來る、元來健康人では飲食物中の水分の量より一割八歩乃至三割二歩だけ減じたと同じ尿量が出る、

然るに心臓病患者は晝間は心臓を勞することが多いから、晝間よりも夜間に割合尿量が多い、又心臓が疲勞して來ると攝取した水分の量に比較すると尿量が割合少くなる、又水分を澤山に飲むと益々尿量が減じて不思議なやうに多く飲んだのに少く出る、此時には心臓が悪くなりつゝあるのである、又心臓が疲勞して假性多血質となり全身に浮腫が現はれて來る時に飲食物中の水分を減ずると尿量が多くなり、少く飲んで多く出る、此時には心臓が宜くなりつゝあるのである、假令又實際の尿量は増加せずとも攝取した水分に對し尿中に出る水量の割合が多くなるだけでも良いので、之が長く続けばそれだけ治療の功が顯はれ快復しつゝあるのである、飲料を減じて尿量の割合も實際も増加せぬは、水分が少し宛にても體內に残り多血状態が増加し、心臓が疲勞しつゝある證據で、心臓は血液の量の増加するのに堪へぬと云ふことは、嘔吐となり或ひは下痢となりて現はれて來る、之一つは心臓衰弱の爲め胃腸の粘膜が浮腫を起す爲めである、かやうに尿利の割合を知ることがは心臓の状態を知るに必要なることであるから、單簡な検査法を茲に述べて置かう、先づ初め二日間患者に勝手に飲食物を食せしめ一日中の飲料及び汁の量と固形食の量を計り、又尿量を計つて置き、次の二日間は固形食は前と同一にして飲料と汁類の量を著しく減じて尿量を計つて見るのである、尤も夜間と晝間の尿量を

區別して計れば一層よい、斯の如くして尿量の割合を知り、之に基いて飲料や汁類の加減をしたならば養生の方針が立つのである、

- 一、平生より心臓に餘力の保存せらるゝ様蛋白質に富みたる食物を與へねばならぬ
- 二、目前心臓の働作を強める爲めには抱水炭素を含めるものを適當に料理して與へることが必要である、殊に糖類は沈衰したる心臓力を早く振起するものである、
- 三、餘り多量の抱水炭素と脂肪に富める食品を連用して居ると、漸次全身に脂肪を附着せしめ、又心臓及び全身にも脂肪を沈着せしむることがある故に慎まねばならぬ、
- 四、飲料を多量に用ふることは心臓の健否に拘はらず、一時性又は永久性の多血状態を來すが故に避けざるべからず、
- 五、但し熱病の時に飲料を多く用ふることは體內に循環せる毒素や新陳代謝産物を洗ひ去る目的であつて却つて心臓腎臓を保護する爲め必要である、
- 六、飲料或ひは流動性食品を多量に用ふる時には、一回の量を少くし回数を多くして用ふれば、少量宛血中に入る水分位は心臓も能く堪へ腎臓も能く捌くことが出来るから、血液の平均状態を保つことが出来るのである、

- 七、アルコール性飲料は成るべく制限せねばならぬ、酒類は容易に血中に進入するもので多量に一度に進入すれば心臓に危害を及ぼすものである、大酒客にても長時間に徐々に飲むならば格別、短時間に大量をあほると苦しむのでも明白である、
- 八、炭酸を含める礦泉は胃腸を膨満せしめ、心臓を窘迫する傾きある故、制限せねばならぬ、
- 九、不消化物は長く胃に停滞し（胃の停滞は直接に、胃の停滞の感覚は間接に）心臓に影響するが故によろしからず、
- 十、半流動性又は半固形の食品は消化せらるゝに随ひ水分を少し宛放し、其水分は少し宛血中に進入する故、回数多く少量宛流動性を用ふるに同じく、心臓に都合よきものである、
- 十一、強き香味料は平素より成るべく用ひぬやうせねばならぬ、
- 十二、腸内で風氣を醸す虞ある食品は用ひてはならぬ、
- 十三、尿量減じ浮腫現れ嘔吐起こる時は飲食物の水分を減せねばならぬ、又食物全體の量も減せねばならぬ、
- 十四、便秘は心臓に悪い影響を興へるものであるから、果物を適當の料理をして服用するのがよい、
- 十五、早急に飲食してはならぬ、又常に空腹でもなく満腹でもなく中腹であるやうにせねばならぬ、
- 十六、攝食後直に労働してはならぬ、少時休息するを要するのである、又勞役後直に食事を取るのも悪い、
- 十七、身體精神が安靜でなければ心臓病者の心臓の安靜は保たれぬ、心臓の安靜を保たれぬ時は胃腸の血行悪くなり食慾も不良となるが故に、食慾落ちたる時は安靜を守れば食慾出ることもあり、
- 十八、規則正しき運動例へば呼吸速迫を起こさぬ程の散歩は却つて心臓力を強め尿利をも増加す、少し度に過ぎると思はるゝ阪路登上の如きも、醫師或ひは看護婦の指導の下には同様の効力がある、假令室に居りても肩の凝るやうな仕事や細々しき不秩序の働かせ心臓を痛め尿利をも減ずるものである、

- 就中長く直立して居ることは、假令身體を動かさずとも、全身の均衡を保つ必要より、

全身の筋肉を疲勞さすもので、隨て心臓の疲勞を起すものである。十九、猶足らざる處は醫師に強心薬を用ひて貰ひ、或は下劑によりて腸の方へ血液を誘導し、或ひは芥子泥、發胞膏等を脚部に貼て脚の方へ血を呼び、或ひは瀉血法によつて直接に血液の量を減じて貰はねばならぬこともある。

附録 脚氣

脚氣は或ひは傳染病の條下で説き、或ひは神経系統の疾病の條下で述べる學者が多いが、予は便宜上既に茲で其食養生を論ぜやうと思ふ。凡て何れの病氣の食養生にあつても、其眼目とするところは、第一には生命の危険を免れしめ、第二には病氣の恢復を計り、第三には患者の症候を軽減するにあるものであるから脚氣の治療にあつても予は此見地より適當なる食養生を案出したきものと永年工夫したのである。脚氣は水腫性脚氣、麻痺性脚氣、及び衝心性脚氣の三種に大別するが、其重症なるものは何れの種類たるを問はず頗る治療家の苦心を要するものである。就中突然生命の危険が顯はれるのは衝心性の脚氣であつて、衝心を起すのは多くは眞性

或ひは假性の多血質のものである、又常に粗食して居るものは此危険より免れ難きことが稀でなく、或ひは一旦其危険を免れて主任醫及び周囲の看護者はやれ／＼と胸を撫で下し油斷するに云ふ譯ではなくとも、まづ生命だけは助かつたと思像して居る眞最中に突然症候が變り急性の虚脱或ひは亞急性の虚脱に陥り、如何なる手段も之を救ふに途なきことが屢起することである、其原因は心臓の麻痺に外ならぬのであるが、之に反して平素相應の肉食をもして居る患者であると、此危険の状態に陥つて時によるに非常の苦悶を起し脈も觸れ難きやうになつても、猶其急場を免れ回復することを得る場合が屢實驗せられるのである。故に脚氣患者の豫後の良否は平素の食物が大關係があり、眞性及び假性の多血質の起ることを食養生にて防ぎ、又心臓がよく衝心と云ふ危急存亡の機会を切り抜け得られる様に平素より用意せねばならぬと考へるのである。眞性多血質と云ふのは血液の性質は悪くはないが、其量が多くなつたもので、假性多血質と云ふのは血液中の水分が多くなり、隨て血液は普通より稀薄となり營養分に貧しくなつて居るのであるが、身體内の血液の總量は健康人に比較すれば頗る多量となつて居るものを名づけたものである、其何れにあつても心臓の働らきに負擔を重くすることは、既に

心臓病の條下で述べた通りである、又粗食の爲に心臓の營養の衰へた患者は脚氣に限らず何れの病氣にあつても危急の場合になると、心臓薬に應じ兼ねて救ふ可からざる状態に陥ることが屢であることは、既に總則の處で十分に述べてある、而して心臓の營養と云ふことは二日や三日で改良することの出来るものでなく、又心臓の細胞が十分なる力を貯へるには、抱水炭素や脂肪では事が足りず、是非平素より蛋白質の供給が十分であるといふことを必要とする、故に脚氣病者にあつても萬一危急の場合に臨んで、能く心臓力が堪へ得られる様にして置くには、平素より相應の魚肉又は獸肉を用ひて置かなければならぬことは容易に了解が出来ませう、然るに本邦にあつては從來脚氣病者には菜食を奨励し、肉食を恰も害あるが如く誤想して居る風習がある、平生野菜物を食して居り殊に麥飯や赤小豆の如きものを用ひて居る場合には、脚氣病者に割合多きところの便秘が少くなり、尿利がよくなることは事實であるが之は患者の生命の危険を豫防する方法でもなく、又病氣の快復を謀る所以でもなく、餘りに病者の容體に重きを置いた療法といはねばならぬ、輕症の患者ならば症候を輕減するに云ふことも悪くはなからうと思ふであらうが、得てして此の如き方法を取つて居る脚氣患者に衝心の場合に救ふ可からざるものが多く出るのである、便秘は脚氣患者の生命を危険

にする性質のものではない、のみならず予は脚氣の治療中數日甚だしきは半月の餘に渡れる便秘を顧みずして、よく衝心の状態より救ひ得た患者は少數ではない、之に反して重症として擔ぎ込まれた入院患者、或ひは至急往診を望まれた自宅で治療して居る患者が野菜を常用して居りしのみならず、過度に下劑を使用した結果と認むべき慢性の下劑を起こして居るもの、甚だしきは肛門括約筋の麻痺せるものをも見ることもある、然るに斯く便秘がなくなつて居るに拘はらず、或は吃逆、嘔吐、或は尿閉、或は複視、或は胸内苦悶、脈搏不正等の危険症狀を見ることがあつて、斯の如き場合に反つて止劑藥安靜藥を用ひ、消化し易き肉食を與へて思ひも寄らぬ良き成績を擧げることが出来たことが時々あるのである、随つて脚氣治療の予の方針とするところは、輕症にも平素より肉食を増加せしめ、重症には危険の時期を過ぎる迄は肉類及び野菜を用ひたる流動性食品を與へ多血質の者にて胸内苦悶のある者には安靜藥、心臓薬を用ふるに共に刺絡、吸角、水蛭等にて瀉血を行ひ、場合に由つては患者の脈の状態が面白くなくとも、其れは前以て多血質であつた爲め心臓が疲勞した結果であること認められた場合には、同じく猶豫なく瀉血を行ひ、心臓の動作の負擔を軽くする途を講じ、或は瀉血迄の必要がなき時には、下劑を用ひて血液を腹部内臓の方に誘導し、或は下肢に芥子泥を貼て下半身に血液を誘導し、心臓に多量

の血液の攻めかけるのを一時防ぐのである、予は下劑を斯様な場合に有効に使用したい考へであるから、心臟に窘迫の症状なき平生より下劑を慎用することはなるべく避けて居る脚氣の治療家中には一にも下劑二にも下劑三にも下劑就中鹽類下劑を脚氣の特効薬の如く心得て居るものがあるが、野菜のみを食物として既に營養の衰へて居る患者に下劑を連用したならば、患者の心臟の營養は如何になるであらうと考へたならば思ひ半に過ぐるものがあるらう、

又未だ營養の衰へざる患者にあつては野菜食と共に下劑を連用して居ると、腸管の方には始終充血を起して腹部には常に多量の血液が集まり、其れで他の血管系統に始めは血液の量が比較的少くなり、心臟の動作が割食に容易く出来る様に見ゆるけれども、之はほんの一時であつて、食物中より進入したる水分や組織中の水分は此比較的少量の少くなり居れる血管系統内に入り、下劑を用ひざる前と同じ状態となるのは自然の法則であるから全血管系統の血液總量は従前と比較すれば著しく増加した譯で、心臟力の負擔を軽くするといふことにはならぬ、下劑が利いて居る間は便通でもあつて患者も患者も氣を慰める位な事は出来るが、一旦此下劑が利かなくなり腹部に鬱滯して居つた血液が他の血管系統に襲來すると、血液の汎濫となり、心臟は此多量の爲に苦しめられるのである、此状態を

予は「下劑に因る多血質」と名づけたい、斯の如き理由であるから下劑は唯時々利用すべきのみのもので、毎日三度々々用ふべきものではない、

脚氣の危急状態が一過したならば流動性食品に留めるといふのは良くない、之も同じく血液の量を増加する虞のあるものであるから、重症と輕症とを問はず脚氣患者に水分の多きものを與へるのは餘程の注意が要る苟くも流動性食品を用ひねばならぬ場合には、少量宛度數を多くして與へ、一時に多量に與へる事は避けねばならぬ、少量宛飲食して少量宛血液中に入れば、心臟は其都度よく之を處分し、腎臓も能く少量宛尿中に出すことが出来るが、一度に多量に水分を用ひ不幸にして一度に多く血液中に吸収せられたならば、心臟は多血状態の爲めに疲勞し、腎臓の血液循環も悪くなり、尿の製造困難となり、甚だしきは腎臓性尿閉を起して水分は血液中に鬱積し、血管系統は益々多血状態となり、心臟は益々動作の困難を感じ、全身の血液循環は益々不良となり、身體各部に鬱血を起し浮腫が現れる、胃腸の粘膜も同じく浮腫の状態になるから、固形の食物は勿論流動体も攝取し難く、且つ嘔吐を催す様になるのみならず、又便通も不整になるものである、

總じて脚氣患者には無用の飲料を用ひぬ様にせねばならぬ、殊に麥酒其他酒類は容易に血液中に進入するものであるから、酒類は嚴禁する方がよい、又炭酸を含有せる飲料も水分

の増すの腹部の膨満を起すので、患者の苦惱を増すことがあるから同じく禁じねばならぬ、

多血に因つて心臓が疲勞し尿利は減じ浮腫は増加し嘔氣が起る様になつた場合には、半流動性の食品を極少量宛分用するのがよい、それでもよくならぬ場合には瀉血をすべく、又絶食せねばならぬ場合もあり、事實食物が少しもこれぬ様になることもある、一定の時を過ぎて尿利も出で心臓も稍容易に働らくことが出来る様になれば、再び食慾が出るやうになるものである、斯くの如き場合には成るべく半固形にして水分を含み居る食品を用ふる

こと、恰も胃擴張や心臓病の場合におけるが如くすれば、食物の消化せらるゝに随ひ水分は徐々に生じ、徐々に血液中に進入するが故に、心臓の動作は比較的容易となり、血行もよくなり、尿の排泄も増加し、次第に浮腫も減ずる様になる、故に「浮腫に對する食養生は水分の制限にあり」と云はねばなりません、

水分の制限といふことを履き違へて乾燥性の食品を用ふると思ふてはなりません、若し乾燥性隨つて下消化の食物を用ふるときは、胃腸に膨満を起こして横隔膜を押し上げる姿となり、胸腔の窘迫を來し心臓に不快の感覺を起こさせるものであるが、就中胃の膨満は勉めて避けねばならぬ、假令消化し易き食物であつても多量に用ふることは宜しくない、胃

腸は所謂中腹の状態にあるのが、心臓に對して快よき感と與へるものである、一派の治療家にあつては米食に罪を歸して、脚氣は貯藏の悪き米を常用する爲に起こるのであると唱へるものもあり、或は米其ものを比難して脚氣の治療に米食を排斥するものもある、然し予は重症輕症を問はず重湯、粥、或は米飯即ち米を主食として用ひつゝ治療して脚氣を全快させ一向米食を忌む可き理由を發見せぬのである、

又一方では動物性食品を次第に増加させて、予の家族、召使に脚氣に罹む者がなくなり、又從來屢々衝心患者なき重症の脚氣患者を出して居つた病家の中にも、よく予の忠告を容れて食物の改良を謀り、漸次脚氣の事を訴へて來ぬ様になつたものも少なくない、又予の治療した脚氣患者で治療後引續き食物の改良を施して迷はざる者は、脚氣の再發を見ない人が多いといふ次第であるから、脚氣の原因はよし何であらうとも、全身の營養就中心臟の營養が良ければ脚氣を發病せず、或は脚氣に能く堪へ病變を増進せしめぬものと考へねばならぬ、斯くの如く脚氣患者の營養改善が必要であるとして見れば、今日喋々せられて居る部分飢餓が脚氣の原因であるといふ説が尤もらしく聞けるが、脚氣の眞の原因は猶不明である、部分飢餓は發病の誘因となることはあらうが眞の原因ではあるまいと思ふ、予一己としては部分飢餓説の信者でないことだけは茲に告白して置く、

衝心性脚氣及び水腫性脚氣のみならず、麻痺性脚氣に在つても食物を改良し、動物性食品を増加すれば病氣の経過を短くし、治癒を早くすることは同様である、予は斯くの如くにして脚氣の養生に一大進歩を企て得たこと喜んで居る間に、近來此改良を逆轉せしめむとする悲しむべき現象が起つて來た、それは脚氣に米糠を應用すること、脚氣には米糠さへ使つて居れば治癒し得べきものと過信して居る人が次第に多くなつて來たことである、

之を食養生上の進歩と云ふことが出來やうか既に國民一般の食物すら改良せなければならぬ今日の現状であるのに、國民の元氣を減殺する脚氣の撲滅を謀る爲に、粗食の上の粗食たる牛馬を飼養するにも比較すべき糠を以てするとは食養生の進歩といふよりも一大退歩ではあるまいか、のみならず未だ脚氣衝心患者の米糠に因つて治癒したる實例を認め得ぬのである、

若し菜食に替ふるに肉菜混合食を以てし、猶米糠を用ひて良結果を擧げたいといふならば予は好んで米糠を種々なる料理品に利用し、實驗を積んで見たいと思つて居るが、今日迄斯くの如き必要を感じず、且斯くの如きことを承諾して呉れる患者が出て來ぬことを遺憾として居る、

米糠を脚氣に効ありと唱へ出したのは、今より二三十年も前フリツピン島に於て鶏を檻禁し、其本然の生活状態を矯め、白米と水のみを與へて、野菜も啄まさせず、蟲も食はさせず、小砂利も拾はさずして久しきに亘り、斯くの如くして起りたる變質状態が脚氣の症候に類似たるものあり、玄米を與へ或ひは糠を加へて飼養すれば、此症狀が現れぬか若くは現れることが遅いといふことに始まつたもので、此説は久しき問學者間に忘却せられて居つたが、近來になつて日本の學者間に大變な勢を得て來た、脚氣屍體の解剖上筋肉纖維、末梢神經、或ひは血管の變化が、恰も糠の全く附着して居らぬ白米を以て飼養したる動物における變化とよく似て居ることを有力なる證據として居るものもあるけれども、類似の變化は異つた原因に因つても起るもので、假令は虎列拉に似たる變化が亞砒酸の中毒に依つて起る、煙草弱視と脚氣弱視が能く似て居る、通俗の比喩を取つて見ると大悍は忠に似たり、大慾は無慾の如しと云ふと同じく外觀は似て居つても本性が異つて居ることがある、予は脚氣屍體の變化が脚氣其ものに因つて起つたものであると云ふことを直に信ずることには出來ぬ、脚氣患者を野菜物と下劑とにて虐待した結果が、身體組織の變化を起したと云ふことが、一部分手傳つて居るのではあるまいか、といふ疑ひが解けぬ、之を解決すが先決問題ではあるまいか、又學者連中が合宿處なきで經驗をなし、或ひは脚氣患者

を集めて糧の効力を試し、或ひは米粒の銀皮なきの効力を検査した時に、斯くの如きもの、みで患者を養ふたのではあるまい、又重症患者を米糠或ひは其成分のみに頼つて治療したものであるまい、苟くも學者たる以上は斯くの如き亂暴なる、患者を虐待する療法を以て進歩したるものなりと考へては居られまいと思ふのである、

陸海軍に於て麥飯を用ふるやうになつてから、脚氣患者の減じたのも、麥飯のみに其の功績を歸することが出来ぬ、同時に行はれた他の衛生上の改良も輕々に附することは出来ぬ次第である、

予は此機會に於て更に國民の衛生状態及び食養生の改善を唱へ、國民平均の健康状態を進め、國民平均の壽命を延ばし、國民平均の活動力を増加することを切望して止まぬ、

脚氣の食養生の概略は御判りになつたこと、思ふから、最後に轉地に就て一言して置かう轉地其物は脚氣の病性を變ずるものでないが、丁稚小僧なき召使者で、其家で十分養生することの出来ぬ者には効能のあることを認める、立て居る者は親も使へど云ふ譯のある通り、他の人より重症と認められぬ間は、一寸何をせよ一寸彼れをせよと命ぜられ、身體を激勞させずとも、使ひ走りや立て居ることなきが多くなり、人目には左程害ありと思はれずして、事實上では心臟に不利益なる不規則なる運動を爲さねばならぬのみならず、他の

召使の手前特別の食物をも與へられて居らぬ者が轉地するところなるに、第一には病氣の爲に轉地すると云ふ觀念が自然體をあしらふこととなり、疲勞を感じたり苦痛を覺たりすれば、身體を休養する、氣分が良ければ散歩でもする、自然趣味のあることならば能力の範圍内ですることになり、能力不相應の事はせず、快く感ぜぬことは無理に強らるることもない、随つて過勞に陥ることは自然に免れることになるのであるから、斯くの如き境遇にあるものには轉地は確かに一定度の功力はあるのである、然るに家の主人とか家族とかで、自宅に居つても轉地先で出来ることは皆享有するものは、轉地をしても割合に利益のないとは日常實驗せられ居るところである、自宅に居て養生を守らぬものは論外であるが養生が出来難くなり易きものは、轉地をすれば所謂依處依心で自宅に於ての出来事は再び見又は聞く迄は心を勞せず、身體を其れが爲に使用することもなく、養生の方のみを専らにすることが出来る、轉地と云ふのはこれ位の利益に止まるもので、脚氣に特功があること云ふ譯ではないのである、

第六節 血液病

予は今此處に貧血に對する食養生の概略を述べやうと思ふのであるが、標題を血液病とし

たのであるから、先づ血液病には種々なものがあるといふことを述べて置かう、白血病といふて血液中の白血球が甚だしく増加し赤血球中の色素も減じて貧血を起すものもあり假性白血病といふて脾臓やリンパ腺や骨髄に變化を起し、外觀上其容體は白血病に似て居るが、血液中の白血球は減少せぬ、それで同じく一定度の貧血症を伴ふて居るものもあり、悪性進行性貧血といふて血液中の赤血球の形が種々に變じ、其數も次第に減じ、漸次強度の貧血に陥るものもあり、ウエルホッフの血斑病、ロイマチス性紫斑病及壞血病杯の如く、皮膚や身軀の他の組織中杯に種々なる出血を起す病氣もあり、血友病と云うて僅の創傷より恐ろしき止め難き出血を來す者があり、尙萎黃病といふて本邦には少いが西洋の婦人では年頃になると目に立て貧血になる病氣がある、此病氣には赤血球の數や形は餘り變化を受ぬが、赤血球中の色素の含量が少くなるのである、發作性血尿病といふて身軀が寒冷等に遭ふと体内では赤血球が壞れて色素が遊離し、尿中に色素が出るものがある、又フィラリア病には寄生動物の爲に乳糜及血液に變化を起し、尿中に脂肪や血液が出る様になる、其外向種々なる血液の病氣があるが總體に貧血症を起すものが多い、十二指腸蟲や其他の寄生蟲に因つて貧血を起すものもあり、癰腫や結核に因つて高度の貧血が起こることもあり、其他種々の病氣の結果で貧血になることは珍しくない、

病氣がなくとも食物の不足や日光の不足の爲に貧血になることがある、予は今此「不足に基く貧血」就中食物の不足に基く貧血に就て一言を費やしたのである、

本邦の婦人には總體食物を輕んずる弊風がある、又嫁にやるべき娘、養子にやるべき兒を持つて居る親達は、他家に縁付きて後飲食物の爲に辛棒が出来なくて、離縁になる様なことがあつてはならぬといふ心配から、平素より子女を粗食に慣らして置く風習がある様に思はれる、予は又途上で顔色の悪き水腫れしたる如き婦人が子女の手を引いたり、或は幼兒を背負ふて居るのに出遣ふ毎に、如何に其食物に不足あるかを思ひ、斯る婦人が産したる子女が第二の國民を形成するのであるかを思へば、亡國の歎息を發せざるを得ざる時が屢あるのである、

中流の人士中にも飲んだり食ふたりして仕舞へば後に何も残らぬが、せめて衣服にでもして置いたならば後に残るといふて、一廉經濟家ぶつて居るものがあるのを見るが、斯かる人は物質上の經濟といふことを知つて、健康上の經濟といふことを知らぬのである、眼前の經濟を知つて永遠の經濟を知らぬのである、飲んだり食つたりしても營養品を適當に用ひるのであれば、健康が残るので永く活動することも出来、壽命を長くすることも出来る之に反して眼前飲食物に節約すれば物質は所有品として残るであらうけれども、健康は劣

等となり、活動力は乏しく、後年の壽命を眼前に縮めるものといはねばならぬ、斯の如き
 人士が國の富を増し、國の生産力を益々發達せしむることの出来るものであらうか、實に
 近視眼的の經濟論者といはねばならぬのである、斯る人士の尙存する間は食物改良論を唱
 導することの益々必要なるを感ずるのである、
 夫はさておき、貧血になつて居る患者の養生は如何にしたならばよからうといふに、總
 體貧血患者は異味を嗜好する傾向を生ずるもので、或は香ばしきものを望み、或ひは酸味
 のものを望み、甚だしきは線香や、灰や、消炭や、壁土等を食するものも出来る、斯る習
 癖は次第に改良せねばならぬ、貧血稍高度なるものには胃や腸も亦貧血になつて居つて、
 隨て食慾も減じ胃腸内における消化作用も衰へて居るから、食物は味よく料理し且つ消
 化せられ易くせねばならぬ、
 然るに貧血になるに直に何かよき薬はなきか醫者に要求し、「ヘモグロビンは如何でせう」
 「フェラトールは如何でせう」といふ様に藥品には割合金銀を借まぬのである、世人は金
 錢を多く要するものを貴いと思ふて居るので、金錢を上手に用ひるといふことを考へぬの
 は誠に残念至極である、上手に用ひれば無機性の鐵鹽類にても有機性のもの以上に効力を
 顯はさせることが出来る、之は藥品の使用法であるから勿論醫者の手腕に待たなければな

らぬ、
 藥品を誤用するに同じく飲食物に就ても同様であつて、養生の不適當なるより貧血が起
 こる、或ひは貧血が輕快せぬのであると聞くに、直に價の貴き魚肉や獸肉やを使用しやう
 として價の廉なる野菜物の方は忘却しやうとする傾向がある、血液の成分は何も動物性の
 食品から重に出来るに云ふものではない、野菜就中青菜は鐵鹽類を多く含んで居るもので
 あつて、青菜を上手に料理して食用に供すればよく貧血をなほすことが出来る、殊に彼の
 怖るべき壞血病の如きは新鮮なる青菜の缺乏に基づくに稱へられて居る位である、然しな
 がら予は青菜のみを用ゆることを御勧めをしない、本来日本人の多くは肉類や魚類を用ふ
 ることが少しく足りない方が多いのであるから、動物性食品と植物性食品を相共に調理し
 味佳く且つ消化し易く飲食する様にせねばならぬ、肉類や魚類を食せず又青菜をも愛せず
 して野菜の中にも主に穀類と根菜とを常用して居るものが、滋養物といへば直に牛乳や
 鶏卵の方に走り、更に一足飛びにヘモグロビン其他のものを彼是れいふ如き人々は、眞に
 御氣の毒なる人士と評せねばならぬのである、
 外傷其他に因つて出血したり、或は他の種々なる病氣が原因となつて貧血に陥りたるもの
 は、それ／＼原因的に處置せねばならぬのは申すまでもありません、

第七節 泌尿生殖器病

腎臓炎

腎臓炎が他の浮腫病と區別せられるやうになつたのは英國の醫師ブライト氏の功績である。而し腎臓炎には尿中に蛋白質が出るのを特異とするこゝを發見せられてよりは、浮腫を來さぬ腎臓炎もあり腎臓炎にも種々あることが知られ、後には尿中の蛋白質に餘り重きを置かずやうになつた結果は、尿中に蛋白質さへ出て居れば、腎臓炎であるを速断するものがあるに至つた、故に予は先づ腎臓炎でなくとも尿中に蛋白質の出る場合のあることを概略次に列挙しようと思ふ、

食餌性蛋白尿、生の鶏卵を空腹時に多く食すれば其蛋白質は同化せられずして尿中に出ることがある、空腹時以外にても餘り多く食すると蛋白質が出る人もある、

所謂生理的蛋白尿、生理的とは名づくるもの、全くの生理的のものではない、矢張り此蛋白尿を出すものは其人の腎臓が他の人より弱いのである、之は數十人の兵卒を一定時間不動の姿勢に立たして置き、其尿を検査すると一部分の兵卒は蛋白質を出して居る、又急速力の駆け足をさせた後或ひは自轉車競争をさせた後に同じく見る所であつて筋肉疲

勞より引いて心臓の努力を要するに至つた結果であらうと思はれる、

熱性蛋白尿、胸壁扶斯、扁桃腺炎、實扶的里亞其他諸種の熱病にあつて、高熱の時に尿中に蛋白の出るのを見る、随分屢起る現象であるが、取り分け猩紅熱には著しいのである、恐らく一は病原が作る毒素の爲め腎臓が傷害せらるゝ爲で、次の中毒性蛋白尿に算入してもよきものであるであらう、又一は熱の爲め體内の成分の分解激しくなり、尿素の如き種々なる分解産物が腎臓を刺戟するにもよる、此熱性蛋白尿より眞實の腎臓炎が發生することがあるのである、

中毒性蛋白尿、皮膚に水銀剤を塗布したり、カンタリスを塗つたり、其他ベルサム剤を外用又は内服にしたり、石炭酸や昇汞や其他の毒物の中毒により、尿中に蛋白が出るこゝ少からず、

血行器病性蛋白尿、心臓瓣膜病、動脈硬化等の爲め血液循環を害せられ、腎臓に鬱血を起すによるもので、其心臓力衰へたる時著しくなる、

貧血性蛋白尿、高度の貧血になれば尿中に蛋白が出る、之は腎臓の營養が悪くなり、最早蛋白質を血液中に残し置き、血液中の無用となりし物のみを選びて尿中に出すと云ふ力が、衰へたるによるものである、

呼吸器病性蛋白尿、胸部を強く窘束緊縛なごすれば、尿中に蛋白が出ることもある、同様の理由にて呼吸器の疾病の或場合には蛋白が出ることもある、
 神経系の病による蛋白尿、就中外傷性神経症の場合によく蛋白尿を伴ふものである、又腦の諸病に蛋白尿を伴ふことがある、延髄の寫瀾には血液中の蛋白や糖の均衡を保たせる中樞のあることが知られて居るのである、
 梅毒性蛋白尿、詳しく理由は判つて居らぬが、梅毒にて尿中に蛋白質が出ることもある、之は水銀療法によりますれば消失する、
 腎臓自家の血行障害による蛋白尿、遊走腎にあつて腎臓の位置が變り、腎臓に入らせる血管が屈撓せらるゝ場合などや、腫瘍などの爲め同じ血管が壓迫せらるゝ時などに來る、
 妊娠腎、之は妊娠中に屢見る所のものであつて、増大せる子宮の爲め腎臓の血行が障害を受けざる爲めであらう、
 糖尿病に伴ふ蛋白尿、腎臓より尿中に排出せらるゝ糖の刺戟により、尿中に蛋白の出るようになることがある、
 乳糜尿に伴ふ蛋白尿、乳糜管及び血中にフィラリア幼蟲の生息する時に乳糜と共に尿中に蛋白出づ

血球崩壊に因る蛋白尿、發作性血尿や、身体の廣き部の火傷等の時に、尿中に蛋白出づ、
 身体の隨所に於ける化膿性疾病に因る蛋白尿、アルブモーズ、ペプトーン等の如き蛋白質が尿中に出ることがある、
 腎石、腎臓の腫瘍、腎臓結核、腎臓澱粉様變性、腎臓膿瘍等による蛋白尿、
 腎盂、輸尿管、膀胱、尿道の疾病に因る蛋白尿、
 此等の蛋白尿を除いた蛋白尿で始めて腎臓炎による蛋白尿であるであらうと思はねばならぬ、而し此等の腎臓炎と異りたる性質の蛋白尿症より眞正の腎臓炎に移り行くこともあるのであるから、よく、醫師の診査を受けねばなりません、
 プライト氏が腎臓炎を他の病氣と區別して腎臓炎を一纏めにして研究した時代頃では、食養生に就てもまだ浮腫や其他の症候に注意を拂はれて居る位に止まつて居たが、腎臓炎には尿中に蛋白が出る、即ち身體は蛋白質を失ふて居る、曰ひ換れば肉を失ふて居るのであると云ふことを知つてからは、自然思慮の道行として腎臓炎患者には蛋白質を補充してやらねばならぬ、肉類は殆んど蛋白質から成つて居るから、肉類を與へたならば宜からうと考へられた、そこで肉類を多く腎臓炎に使つた所が尿量は減り、頭痛や、嘔吐や、痙攣など、即ち後日尿毒症と名づけられた所の症狀が屢起る、のみならず尿中に出る蛋白質の分

量も増加する、随つて動物性の食品では希望する所の結果を擧げることが出来ぬことを認め、動物性食品が悪いとなれば植物性食品を試験して見るのは人情である、處が植物性の食品は大抵は尿中の蛋白質を増さないのみならず、又尿毒症を起させるとも少い、即ち植物性食品は腎臓炎に適當なものである、然しながら急性の腎臓炎で症候の烈しき時や、尿毒症の時には、胃や腸が弱つて居るから、粥や重湯や葛湯なきなれば兎に角、一般の植物性食品では胃や腸やが堪へない、又慢性腎臓炎にあつても長らくの間植物性食品のみでは營養を十分にするとが出來難い、随つて人情の常として再動物性食品の内では本病の害の無いものが無いであらうか、或は害の少いものはあるまいかと穿索するのは無理ならぬことである、そこで發見せられたのが動物性を一度くゞつて來た所の牛乳と卵である、先づ牛乳に就て述べて見やう、

牛乳は胃腸の弱きものにも尿毒症の起りかゝつて居るものにも用ふることが出来る、のみならず尿量は増加する、尿中の蛋白質は増加せぬ、それで營養分は蛋白質、含水炭素、脂肪の三要素共に適當の割合に含んで居るのであるから、牛乳のみで患者を満足せしむることを得る場合には、腎臓病者の誠に結構なる營養品と云はねばならぬのである、而しかうなると又極端に走り易いもので腎臓炎でありさへすれば如何なる場合でも、牛乳は患者

が嫌ひであつても用ひやうとする、牛乳以外にも植物性食品にも、粥や、飴や、其他料理法さへ改良すれば都合のよきものが澤山あることを忘れてしまふ、實に無分別と言はねばならぬのである、

牛乳に因つて尿量の増加するのは近來になつて牛乳中に含まれて居る乳糖と、牛乳が都合よく体内を洗ふことに因ると云ふことが知れた、故に牛乳のみにては身體の營養を充分にするこの出來ぬ場合には牛乳に乳糖を特別に加へ、また乳糖も腎臓炎に害がないから乳糖をも加へたら良いのである、乳糖も乳脂も營養價に富んで居る、

然し事物はそう簡單に都合よく行かぬのである、如何しても牛乳の嫌ひの者もある、又牛乳が嫌ひでなくても、慢性腎臓炎の如き長い間養生せなければならぬ時には、始終牛乳のみにて打ち通すことは困難である、牛乳のみで体力を落さず向体力を増加するだけの多量の牛乳を飲むことが出來ぬのみでなく、始め飲み得たる分量は日數のたつに随つて減するものである、

牛乳より他に腎臓炎を悪くせぬ動物性食品は鶏卵の卵黄である、卵白は尿中の蛋白質の量を増す故禁ぜねばならぬが、卵黄中の蛋白質たるブウィッテリンは割合腎臓を害せぬのみならず、卵黄中の脂肪も牛乳中の脂肪の如く割合に卵黄を味美くするものであり、其うへ

卵黄のみなれば仰臥位にても嚥下することが容易でもあり、又卵黄を色々に料理することが出来るから、急性腎臓炎にも時々使ふてもよし、慢性腎臓炎には屢使ふても差支へはない、
 其他の動物性食品中で越幾斯分に乏しき肉、例へば犢の肉、鳩の肉など所謂白き肉と稱せらるゝものは、赤き肉即ち越幾斯分に富んで居るものよりは害が少い、
 而し害が少いと云うだけであつて、無論急性腎臓炎には禁ぜねばならぬ、又多くの野菜類に比すれば害ありと云はねばならぬのであるに、色の白い肉と云ふ語に重きを置きて、越幾斯分の多少を問はず、自身の魚の刺身を急性腎臓炎に許す醫者が随分ある、それで牛乳を賞用して植物性食品では粥まで禁じて居るものがあるが、實に抱腹絶倒の事柄である、
 試みにさしく色々の野菜を使ふても見又恐るゝ、自身の魚肉を使ふて尿中の蛋白の量を検査して見たならば一目瞭然であつて、直譯せる白肉の腎臓炎に害あることを知るであらう、又多数の患者を扱つて見たならば所謂白肉の應用を許された患者中には、治癒すべき急性腎臓炎を難治の慢性腎臓炎たらしむるものが、如何に多いかを知るであらう、而しこんな試験に使はれる患者こそよい面の皮である、却てさしく野菜物を使はれた患者の方が、如何に幸福であるか云はねばならぬ、無論野菜物を使ふには、胃腸の状態を斟酌し

て、適當に料理すべきものたるは論を俟たぬ、植物性食品の或物には安息香酸エステルに富んで居るものがあつて、腎臓炎に害があることがあつて唱へる學者もあるが、之は理屈に過ぎた非難で、日本人が常用する野菜にアレモコレモ安息香酸エステルを含んで居ると云ふ譯でなし、又實地上には殆んど斯の如き弊害を認めぬのである、
 茲でも能く断つて置かねばならぬのは、予を菜食論者と誤認して呉れてはならぬことである、予は只植物性食品を能く善用したきと共に、牛乳、卵黄の如きものも成るべく飽かす出来るだけの方法を講じて同じく善用したのである、植物性食品と云へば近來西瓜糖を恰も腎臓炎の特効薬の如く心得て、腎臓炎には何も他の物は入用でないやうに喋々し西瓜の種類迄喩々する自稱大家もある、西瓜に利尿の作用あるとは予も認める、而し之はサハリッドを含むで居る爲で、乳糖に利尿の力があるのも、茅根に利尿の作用があるのも同じ理由で何も西瓜に限つたものでない、且利尿を良くするばかりが腎臓炎を治癒さす所以ではないのである、凡て一部分の事を知ると他を顧みるの暇がなく、一方に執着する癖があるのが、時代醫學の大弊害であるに茲にも痛罵したくなる、
 萎縮腎になると急性腎臓炎や慢性腎臓炎とは大分趣を異にして居る、利尿も多い、症候も少いので、つい見落され易い、日本人で五十歳や六十歳で死んだ者を屢老衰で死んだと云

うて怪しむものがないが、如何に早老の日本人であるからとて、病氣がなくて五十歳や六十歳で死ぬものはない、少数ではあらうが營養不給で早く死ぬる者もある、之を除き又多數の醫師の認むる病氣で死んだ者も除き、残りの俗人も醫師も老衰即年齢老衰弱して死んだと信じて居る者の内には、随分此萎縮腎で死ぬ者が多いのである、之は予が年長者を診察する機会が多かつたので實驗したのであるが、初診の患者には必ず尿を検査する、又死んだ後にても未だ尿の検査を受けて居らぬ者には、膀胱内の尿を取つて其比重と蛋白質の有無を検査するだけの熱心家なれば、必ず同意見になられるであらう、そこで五十歳や六十歳位の人は寒胃位の病氣でもころりつと死ぬことがあるなき、思はず、醫師に診察して貰ふ機会のあるものは必ず尿を検査して御貰ひなさい、又達者過ぎて一日も就床したこともないと云ふ様な人にも、何か注意すべきことはいないかと御尋ねになれば、夜中小便が近いか近くないかと云ふ點を御注意なさい、老人ですから小便の近いのは當然であるなきと思ふてはならぬ、萎縮腎には夜中三回も五回も排尿の爲め起きねばならぬと云ふ事より他症候のないのが随分多い、萎縮腎には其結果腦出血を起すことが稀でない、酒客でもなく肥満家でもないのに腦卒中で倒れるものは、此病の潜んで居るものに多いのであるから、既に萎縮腎があることを知り單に腦出血に罹つてはならぬと注意して、其方だけの餘

險に近づかぬ様に用心するだけにても、死亡数は頗る減するものであると信ずる、また慢性腎臟炎より萎縮腎になるものも随分多いのであるが今迄時々尿量が減じて種々の症候が起ることもあつたが、次第に尿量が増したと喜んで居るうちに、二十四時間に一升五合二升も出るやうになり、尿中の蛋白が減じた増したと一喜一憂して居つたのが蛋白が次第に減じ或は全く無くなることもあると喜んで居る内に、尿の比重は非常に軽くなり、總体が老人の萎縮腎即ち動脈硬變から來る萎縮腎と甚だ能く似て來る、斯くの如き者は年若くとも同じく腦出血を起す恐れあるものである、腦出血は起さずとも、次第に心臓が悪くなり、血管も悪くなり、眼底病も起ることが稀でない、皆質のよくないのであるから、只症候が軽くなつたのを喜んで油断してはならない、其上萎縮腎になつてからでも時々増悪して、甚だしきは尿毒症に陥ることもあるのであるから、用心が肝要である、萎縮腎になつても猶干遍一律に牛乳療法や野菜療法を墨守して居ると次第に衰弱を起して來る、食物の不給不調和は本來弱くなるべき心臓を更に悪くするのであるから、病來を悪くせぬと云ふ養生法に衰弱を防ぐと云ふ養生法が加はらねばならぬ、之が爲には牛乳や野菜や卵黃の外に、越幾斯分に乏しき肉類を割合屢食膳に上し、健康の増進を謀ると共に病氣其物を増悪することなきやを常に監督せねばならぬ、場合によつては少々病氣の度を

増すも衰弱を防ぐために随分思ひ切つて營養に富んだ食品を與へねばならぬこともある、慢性腎臓炎に就て、も一つ注意を促して置かねばならぬことは、急性腎臓炎より變じたものでなく、初めより慢性に起り症候も少く、何年月前より起りしや、其起源の明白ならざるものである、此所謂原發性慢性腎臓炎にも色々種類があるが、餘の種類は今略して置すが、見のがしの出來ぬことは本邦には結核性腎臓炎の豫想外に多い事である、之は熱發ある結核患者の高熱の時に來る熱性蛋白尿ではなく、別に熱によつて蛋白尿を起す程の高熱もなくして出る蛋白尿で、尿量も餘り減ぜぬものが多く、他の結核性症候は割合に目に立たず、腎臓炎の方が特に著しきものである、能く注意して他の慢性腎臓炎と區分して、食養生も腎臓炎を餘り憎惡せぬ以上は、體質を強壯にするに云ふことを主眼とせねばならぬ斯くの如き患者は油断をするに後日恐ろしき結核の症候を示すやうになるのである、尿毒症は急性腎臓炎、慢性腎臓炎、萎縮腎の何れの時期にも來ることのあるものであるが急性尿毒症は急性腎臓炎に多く、慢性尿毒症は慢性腎臓炎、萎縮腎に來る方が多い、急性尿毒症の起る時には尿閉、頭痛、嘔吐、視力障害、呼吸困難などに尋で人事不省、強烈なる全身痙攣發作の起るものである、慢性尿毒症は症候散在性であつて、時々現はれ又消失する性質を持つて居り、又症狀も一般に稍輕きを常とする、尿毒症の時には餘り多量の液

量と與へぬやうにし、牛乳も減じ却て消化し易くしたる植物性食品就中含水炭素より成るものを與へるが良い、尙急性尿毒症には刺絡と云ふて肘關節の處で血液を一台乃至二合程瀉血し、生理的鹽水を皮下注射することを御奨めする、急性尿毒症に罹つたものは大抵死すべきものとせられて居るが、予は此方法で幾人も助け、且生命を助けたのみでなく本病をも全治させたものがある、病氣の全治と云ふ方より云へば慢性の尿毒症を起すもの、方が困難であるが、生命の方は危険が少い、生理的鹽水を直腸内へ灌注するのは急性慢性どちらの尿毒症にもよろし、腎臓炎患者は尿毒性痙攣、或は尿毒症性喘息、或は尿毒症性心胸部絞窄痛、或は急性虚脱、或は慢性虚脱、或は腦卒中の一の現象の下に死に至るものであるから、此端緒が見えたら十分の用意をして治療にかゝらねばならぬ、腎臓炎の何の種類何れの時期にあつても、酒類、山椒、胡椒、芥子、蕃椒、天葵、生姜、葱、菲等の香味料は食品中に用ひてはならぬ、健康人にも斯くの如きものを濫用して居ると後日腎臓炎に罹る虞のあるものである、餘り鹽がらき食物も同じくよろしくない、珈琲、茶の如きものも亂用せぬがよい、只珈琲、茶を適當に用ふれば薬品の代用をする時もあり又牛乳を飲み易からしむるため應用せなければならぬこともある、醋は舌を刺す力がある

故甚だ刺戟性のあるやうに想ふものもあるが、之は体内に入れば燃焼して炭酸となるから腎臓に到る時には既に之を刺戟するものではない、殊に果物酢の如きは腎臓炎に應用の途が廣い、

心臓病におけると同じく規則正しき且疲労を感じざる運動は散歩位の程度にて病症に比し過度ではないかと思はる、程にても、本病に害なきこと多く、外觀上軽度なる如きも不規則なる運動は、例へば室内にて雑用を辨する位の事にも害がある事が尠くない、又平臥位の時が尿中に蛋白の下る事最も尠く、尿の排泄量は最も多く、坐位又は椅子に腰を掛けて居る時が之に次ぎ、起立して居る時が尿量最も尠く尿中に出る蛋白量は最も多いものであるから、此點は能く注意して貰はねばならぬ、

入浴は腎臓炎の或時期には腎臓の働きの一部分を皮膚に代理せしむるものである、又頭部を冷却しつ、褥中にて施す熱氣浴も同様である、但し濫用と時期を過まつことは大に慎まねばならぬ、

下劑を時々有効に應用するのは大切な事で、之に因つて一時腎臓の仕事の一部だけにても腸に代理せしむるのであるが、之も濫用して腸が慣れて効力がなき儘に使用してはならぬ、

くさいやうであるが腎臓炎には兼て心臓が衰へるものであるから、心臓病の處で述べた點を参照し、腎臓を害せぬ點は皆茲に應用せねばならぬことを警告する、

次に腎臓炎に用ゆべき食箋の例を掲げやう、但し本病に用ゆる料理は成るべく煮出し汁を用ひず、汁類にても水を用ひ、醬油と砂糖にて味を調ふるがよいのである、

食箋第四十五

午前八時 粥 山芋 牛乳一合 附干	午前十時半 牛乳一合	午後一時 粥 姫百合 牛乳一合 附干	午後四時 麵 牛乳一合	午後七時 粥 山豆腐汁 牛乳一合 附干
-------------------------------	---------------	--------------------------------	-------------------	---------------------------------

食箋第四十六

午前八時 麵 牛乳一合 附干	午前十時半 麵 牛乳一合	午後一時 粥 牡蠣 牛乳一合 附干	午後四時 麵 牛乳一合	午後七時 粥 蓮根 牛乳一合 附干
-------------------------	--------------------	-------------------------------	-------------------	-------------------------------

食箋第四十七

午前八時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午前十時半 牛乳一合	午後一時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午後七時 果物スープ	午後七時 粥 梅牛乳一合 干合汁
---------------------------	---------------	---------------------------	---------------	---------------------------

四百四

食箋第四十八

午前八時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午前十時半 紅茶入牛乳	午後一時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午後四時 果物ゼリー	午後七時 粥 梅牛乳一合 干合汁
---------------------------	----------------	---------------------------	---------------	---------------------------

食箋第四十九

午前八時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午前十時半 牛乳一合	午後一時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午後四時 牛乳一合	午後七時 粥 梅牛乳一合 干合汁
---------------------------	---------------	---------------------------	--------------	---------------------------

若し胃腸が堪へ難く見れば、流動性の食品を望ましく思はる、場合には次の如き食箋に依る

がよい、

食箋第五十

午前八時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午前十時半 か、を入牛乳	午後一時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午後四時 葡萄のリモナード	午後七時 粥 梅牛乳一合 干合汁
---------------------------	-----------------	---------------------------	------------------	---------------------------

食箋第五十一

午前八時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午前十時半 珈琲入牛乳	午後一時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午後四時 西瓜糖	午後七時 粥 梅牛乳一合 干合汁
---------------------------	----------------	---------------------------	-------------	---------------------------

食箋第五十二

午前八時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午前十時半 西瓜糖	午後一時 粥 梅牛乳一合 干合汁	午後四時 林檎淡雪	午後七時 粥 梅牛乳一合 干合汁
---------------------------	--------------	---------------------------	--------------	---------------------------

四百五

胃腸が堪へ得らるゝやうになれば、再び次の様な食箋に依る。

食箋第五十三

午前八時 粥 卸 牛乳 大根 梅 干合	午前十時半 麵 麩 牛乳 一合	午後一時 粥 馬鈴薯粉吹煮 牛乳 一合	午後四時 牛乳 一合	午後七時 粥 ふきで慈姑 牛乳 一合
------------------------------	-----------------------	---------------------------	---------------	--------------------------

食箋第五十四

午前八時 粥 田每豆腐 牛乳 一合	午前十時半 柑類ゼリー	午後一時 粥 蓮根梅肉和 牛乳 一合	午後四時 栗の金團	午後七時 粥 お多福豆 牛乳 一合
-------------------------	----------------	--------------------------	--------------	-------------------------

牛乳が生來嫌いな病人には、次のやうな食箋より始める。

食箋第五十五

午前八時 粥 大根養老汁 梅 干	午前十時半 葛湯	午後一時 赤小豆粥 梅 干	午後四時 西瓜糖	午後七時 粥 野菜刺身汁 梅 干
------------------------	-------------	---------------------	-------------	------------------------

食箋第五十六

午前八時 粥 蘇青卸し和 梅 干	午前十時半 飴湯	午後一時 粥 牡丹花汁 梅 干	午後四時 西瓜糖	午後七時 粥 獨活梅肉和 梅 干
------------------------	-------------	-----------------------	-------------	------------------------

食箋第五十七

午前八時 粥 野菜生酢 梅 干	午前十時半 牛乳入珈琲	午後一時 粥 霞豆清汁 梅 干	午後四時 牛乳製葛湯	午後七時 粥 春菊浸し物 梅 干
-----------------------	----------------	-----------------------	---------------	------------------------

食箋第五十八	
午前八時 粥 豆腐の蒲鉾 味噌汁 梅干	午前十時半 牛乳入か、を
午後一時 粥 茄子の松もぎ かき菜百合煮附 梅干	午後四時 枇杷羹
午後七時 粥 南瓜煮附 菠薐草スープ 梅干	

若し牛乳のみにて營養を取らさうと思ふときは、先づ次の如き食箋に依り其堪へらるゝを見れば牛乳のみになしてもよし、
但牛乳のみにては餘程大量を用ひねば體力を維持する事が出来ぬ、

食箋第五十九

午前五時 牛乳一合	午前七時 珈琲入 牛乳	午前九時 牛乳一合	午前十一時 牛乳一合	午後一時 か、を入 牛乳	午後三時 牛乳一合	午後五時 牛乳一合	午後七時 紅茶入 牛乳	午後九時 牛乳一合	午後十一時 牛乳一合
--------------	-------------------	--------------	---------------	--------------------	--------------	--------------	-------------------	--------------	---------------

子宮癌

本病は早期の診断と早期の手術が大切で直腸癌とよく似た運命を持つて居る、只婦人の悲しきには陰部を診て貰ふのであるから、恥しいと躊躇して、つい手術の時期を過ります、恥しい位で生命を棒に振つてなりません、本病にても体力の衰弱と便通前後及便秘の時に苦痛を増すのが、食養生の必要を的切に感ぜしむるのでありますから、直腸癌の條下に述べたことを参照して御貰ひ申したい、

子宮周圍炎及近圍炎

食養生に就ては盲腸周圍炎の條下に述べたることを参照せられたきものである、化膿性の子宮近圍炎である、一時も早く手術する方が危険も少く、手術も容易であらう、周圍炎にありては假令化膿性であつても、一應盲腸周圍炎と同様に扱ふ方が安全で有らうと思ふ、

第八節 物質代謝病

糖尿病

糖尿病を大別して二種類とする、第一種は膵臓、延髄、脳の垂体等の部分に腫瘍其他の變化が出来て起るもので、之を續發性の糖尿病と云ひ、膵臓の一部分に變化が起つて糖尿病となつたものは、外科手術によつて其病變のある部分だけを都合よく切除して了うことが出来れば全快するが、延髄及び脳の垂体の病變は外科手術を施す事が出来ぬから絶対に治療することがない、第二種の糖尿病と云うのは身體における糖の同化力の衰退、或は廢滅に因るものであつて、之は大半食養生に因つて全治することの出来るものであるから、後に其本性を簡單に判り易く説かうと思ふ、今假りに此種のもの眞性糖尿病と名づけて置かう猶ほ外傷を受けた時に外傷性神経症を現はすと共に、糖尿病を起すことがある、外傷性糖尿症と云うてよろしからう、又健康人にも空腹時に多量の葡萄糖を食へると尿中に糖が現はれる人がある空腹でもない時でもむやみに菓子を食べたり、或は甘味のある果物を澤山に食へると同じく尿中に葡萄糖や果糖が出て來る事がある、之は食餌性糖尿症といふものである、更に又フロリヂン、アドレナリン、其他種々の藥品に因つて尿中に糖が出る事が

ある、之は中毒性の糖尿病と云ふもので、之等は皆別々に分類しても宜しいが、本來は糖の同化力が衰へる爲に外ならぬのであるから、第二種に屬さしておいても差支はない、澱粉は消化管内で結局糖に變化せられて血液中に入るのであるが、血液中には千分の三迄しか流通して居る事が出来ぬ、夫以上になると直に腎臓から體外に排出して、尿中に現はれるのである、然るにそれより以上の分量が血液中に進入する時には、此餘分だけは肝臓の力に因つて、グリコゲンに變ぜられて、主に肝臓内に貯へて置かれて、血液中に循環せる糖分が減つた時に血中に出で、糖に變化して燃焼される様になるのである、此肝臓内でグリコゲンに改造せられたり、或は血液中を循環しまして諸所の組織内で炭酸と水とに燃焼されたりする作用が減退したならば、已むを得ず血液中に糖分が堆積せねばならぬ、血液中の糖分が多くなつて〇、三%以上になれば、餘儀なく腎臓より尿中に尿糖に出ねばならぬ、之が即ち糖の同化作用が衰へたといふのである、斯様に澱粉から糖が出来るといふ事は誰も知つて居り、尿中に出る糖分が多ければ多き程糖尿病は重症で、危険の容体が起り易いのであるから、此點のみに留意する醫者は澱粉性の食物を止めて肉食をなさいと口癖のやうに曰ふので、それで實行の出来るを否とを考へぬ人も多い様に思はれる、肉食のみにては物の半月一月も辛棒の出来るものではない、又

肉食のみにて、人間の生命が保てるものではない、然らば何か都合のよい方法はあるまいか、治療上糖尿病を分けて三度とする、平生の食物より幾部分か澱粉性のものを減じたなら、尿中に糖分の出ぬ様になるものを第一度とし軽症である、澱粉性の食物を全く除かねば尿中に糖が出ぬやうにならぬものを第二度とし中等症である、澱粉性の食物を全く廃しても猶尿中に糖分が出るものは第三度とし重症である、第一度の糖尿病の食養生は實行も容易であるが、既に第二度の糖尿病になると餘程困難を感ずる、第三度の糖尿病の中にも猶ほ澱粉性食品の外蛋白質の食品を一定程度迄減じたならば、尿中に糖分の出ぬやうになるものがあるが、斯くの如く試験的に食物を與へて一旦尿中に糖分の出ぬやうになる患者は、色々工夫をして食養生をすれば全治させる事が出来るので、其方法は困難であり工夫は六ヶ敷いと云ふもの、治療といふ大なる報酬が之に伴ふのである、而し第三度の糖尿病の多くは食養生上餘り大きな功績を擧げる事は出来ぬ、又一般に行はれて居る糖尿病の攝生法を嚴重に執行すると唯患者を苦しめるのみに過ぎぬから、患者の健康を維持し生命上の危険を少がらしめるのを眼目として、病氣の輕快を謀るといふことには餘り重きを置かぬやうになつたのが、現時の状態である、

然しながら澱粉の同化力は一定程度迄は体重と相平均するものである、語をかへて云へば体重の大なるものは抱水炭素に對する許容力は軽重の小なるものよりも遙に優つて居るから軽重を増加さすといふ方法は糖尿病の輕快を謀る一の手段である、故に第三度の糖尿病にも食養生の途がないとは云はれぬのである、

西洋料理では動物性食品の代用になる料理法が糖尿病に對して種々出来て居るけれども、日本料理では第二度以上の糖尿病の適當なる食品が未だ撰定せられて居らぬ、植物性食品中にて青菜の葉の部分の如き全く含水炭素を含まざるか、或は含んで居つても少量のものは、糖尿病に使用の出来るのは無論であるが、青菜と肉類とのみにては容積が低く腹が頼りなくて致し方がない、且又勞働食品となる都合のよき飲料品も見付からぬから、此不幸なる病氣に罹つて居る人々を救ふのは非常の苦心を要するのである、糖尿病患者は非常に渴を覺ゆるもので、水を見ても、水の音を聞いても、水色のものを見ても、水の事を思ひ出して、堪へられぬ口渴を覺ゆるものであるから、まづ此點から害のなき飲料を選ばねばならぬ、番茶、麥湯、珈琲、ブロン等澱粉質がないか、或は混じて居つても種々の痕跡であるから用ひて差岡へはない、之に反して患者の營養に少しでも利益になるやうに思ひ、牛乳を飲料として與へ、而のみならず牛乳療法迄企てた人が

あるけれども、牛乳の養分の約三分の一は乳糖であつて、乳糖も葡萄糖、果糖と等しく糖尿病には容易に尿中に出るものであるから、此通り方は誤れりといはなければならぬ、予は大抵の動物性食品を忌みなければならぬ、腎臓炎に、動物性食品たる牛乳が少しも害がなきことを發見せられたと同じく、大部分の植物性食品を忌むところの此糖尿病にも、何か植物性の食品殊に割合多く含水炭素を含んで居つても害なきものがありはせぬか、あれやこれやと穿鑿した結果、西洋には豆腐のないことを思ひ出した、若し西洋にも豆腐があつたならば、試験好きの西洋の學者は、豆腐が糖尿病に對して害ありや、害なきやを研究したであらうと考へる、そこで予は先づ取敢ず豆腐の前身たる今日で所謂豆スープを試用して害なきを見、次で豆腐を使ふて見た、其病人は一人は數年間各地の病院に入院して成績の上らなかつた患者で、牛乳を飲料として居つた、一人は刑事巡査で米飯を非常に制限し、或は之を廢し葉菜と肉類とのみを用ひて居つたが、腹に力がなく刑事被告人等を追つかねばならぬ場合なきに頼りなくつて仕方がないから、嵩のある胃袋の膨れる食物にて、糖尿病に害のないものを工夫して呉れ頼まれた、第一の患者には口渴を防ぐに豆スープを用ひ、第二の患者には腹の力を造るために、豆腐をさまざまにして食せしめた、此兩人共尿中に糖が殖へず、反つて糖分が次第に減少したから、十年來多くの糖尿病患者に

使用したが一回も思ひ付きの誤つて居ると認められなかつたのであるのみならず、豆腐は比較的蛋白質にも乏しく、且つ植物性の蛋白であると云ふ點から、腎臓炎にも試みたが腎臓炎にも少しも障害のないことを認めた、此蛋白に乏しいといふ點が益々尿中に糖分の出ることを減じさせた一要素たることを知つて、第二度の糖尿病のみならず、第三度の糖尿病にも結構なる食品であることを實驗し、更に進んで糖尿病と腎臓炎と合併したる如き食養生の相反對せる二病の合併して最も治療家を苦むる場合にも、見事なる營養品たることを實驗した、斯くの如き次第でありますから、機會のある毎に、醫師諸君に豆スープ及び豆腐應用を勧誘し、患者にも獎勵し來つて居る、將來も亦此食品の賞用を一般に廣告する考へて居るのである、

そこで随分手古摺られた糖尿病の食養生も、豆腐と肉類とを土臺としたならば、日々實行することが出来る、随つて架空の論說で患者を沖に迷はし、終には失望の極自棄となり、不養生を敢てすると云ふ弊害を防ぐことが出来るのみならず、如何に長時日でも永續することが出来て、不治の病症と想はれたものも回生の幸福を享けられるのである、豆腐の料理も肉類の料理も第一食より第五食までに澤山掲げてあるが、本病に使用する食品の調味には、食鹽や醬油や種々なる煮出汁を用ひてもよいが、砂糖を用ひぬがよい、甘味を

飲する場合にはさうしたら宜いかと云へば、極少量のサッカリンを用ひたら十分である、サッカリンは世間から其眞價を誤解せられて居るから、茲にサッカリンに就て一言して置かう、

市場に販賣する食料品にサッカリンを以て調味することは法律が禁じて居る、之は至極嚴當である、何となればサッカリンは營養價を持つて居らぬのみならず、人身體內に入つて何等の功績をも擧げずに、素通して體外に出るものであるからである、然るに此罪を犯した奸商がある、各新聞は口を揃へてサッカリンは劇毒である、サッカリンの入つて居るものを喰へば大病が出るやうに書く、誠に新聞記者なきの無學は憐むべきものであるが、世を過ること甚だしきのみである、食料品としては營養價に富んで居る砂糖と云ふものがあるに、之を使用せずして恰も使用したかの如き外觀を作り、世人を欺きて暴利を貪らむとする商人は憎みても餘りあるものであるが、サッカリンを罪するに至りては若し知識があつてするならば、それは假面で無智の者を威嚇するに云ふもので、彼の奸商と共に見せなければならぬのである、總論新聞記者が自分の知識の足らぬ醫事衛生上の事を新聞に書いて居るのは、多くは間違つて居ることを傳へるのであつて、中には無智の患者を籠絡せやうとする俾諷なる醫者屋や賣藥店の提灯持をするのが少くないので、世道人心を蠱毒する

の甚だしきものと云はねばならぬ、余が此著述をするのも元は之を憤慨して、少くとも余自身の立脚點を公開するのである、

餘談は扱置き、余は自分自身屢サッカリンを試食したのみならず、犬及び兎に就て毎日二瓦三瓦等大量のサッカリンを胃管カテーテルを以て胃中に入れ、半月間も動物試験を施したが動物の健康には何等の害を起すことを認めなかつた、人間では一瓦の十分の一でも非常の甘味を感じるものであつて、斯様に大量を用ゆることは實地上に更にない、處が前にも述べた通りサッカリンは体内に入りても何等の變化を起さず、自分自身も殆んど何等の變化をも受けずに、體外に出るもので、普通の水にも劣れるものである、否水は自分自身は變化を受けぬが、人身の重量の約三分の二は水より成り、其體形を保たしめて居るのみでなく生體内の理學的化學的の現象は直接間接共に水の力に依るものであるから、サッカリンと水との價値は天泥の差異がある、此道理で正面からサッカリンを用ゆる者を詰責したらよい、

サッカリンは健康體に用ひては斯くの如く無價値のものであるが、糖尿病に用ゆると其無害無變化と云ふことが非常に貴重なのである、サッカリンは極少量を用ひても食物に甘味を與へるものであつて、只其缺點は少しく厭や甘きこと、ひつこく永く口内に甘味の殘

ることである。糖尿病には少しも害がないから、甘味がなければ食し難く、甘味があれば飲食し易く、食慾が之に因つて左右せらるゝと云ふ場合には、安心してサツカリンを用ゆるがよい。

ついでに酒類の事を一言して置かう、糖尿病に酒類を禁ずるのは所以なき事である、衛生上からアルコホルは一般に制限したがよいと云ふ理由からならば余も賛成する、而しアルコホルからは糖分は出来ぬのである、糖からなれば炭酸ミアルコホルミが出来るもので、アルコホルは糖が既に一度度迄燃焼したものであるから、糖尿病を特に増悪するものではない、只糖分を含んで居る酒精飲料はアルコホルの爲ではなく、其糖分の爲めに害が起るのである、のみならず糖尿病患者の一部に對しては其體力を保存する必要上故にアルコホル性飲料を使用せねばならぬ場合もあるのである。

第一度 糖尿病

食箋第六十	午前八時 飯一 豆腐煮 梅落卵干汁	午前十時半 豆スープ	午後一時 煮豆腐 梅菜清干汁	午後四時 ブリオン 鶏卵	午後七時 肉牛鍋 (肉、豆腐、鶏卵、松茸、葉菜)
-------	----------------------------	---------------	----------------------	--------------------	--------------------------------

食箋第六十一

午前八時 豆攪 梅玉厚干	午前十時半 豆スープ	午後一時 煎豆 梅煎豆(不用)	午後四時 豆スープ	午後七時 豆 梅鶏肉干鍋
--------------------	---------------	-----------------------	--------------	--------------------

食箋第六十二

午前八時 煎飯 梅田每豆干	午前十時半 豆スープ	午後一時 刺豆腐 梅鶏卵大根干汁	午後四時 牛肉搾汁 鶏卵	午後七時 魚飯 (野菜、葉菜同)
---------------------	---------------	------------------------	--------------------	------------------------

食箋第六十三

午前八時 豆 梅卵黄干	午前十時半 豆スープ	午後一時 魚飯 梅魚豆雪の中干汁	午後四時 ブリオン 鶏卵	午後七時 五飯 梅鶏肉干鍋
-------------------	---------------	------------------------	--------------------	---------------------

食箋第六十四

湯豆 午前八時
オムレツ 午前八時
梅ビフゼリ 干

午前十時半
豆スープ

梅蒸刺飯 午後一時
玉子 午後一時
干汁身碗

午後四時
鶏卵
豆スープ

午後七時
ちり(豆腐、魚、葉菜)

食箋第六十五

飯半 午前八時
鶏卵掛豆碗 午前八時
梅魚、短冊大根 干汁

午前十時半
紅茶 (砂糖不用)

飯半 午後一時
ふわ、肉の豆碗 午後一時
梅野菜ミ肉のスープ

午後四時
牛肉精
鶏卵

飯半 午後七時
魚卸煮玉掛碗 午後七時
梅田毎豆干

第二度 糖尿

食箋第六十六

豆 午前八時
落玉ビフゼリ 午前八時
梅番茶 干

午前十時半
豆スープ

梅青刺豆 午後一時
菜腐 午後一時
清干汁身粥

午後四時
鶏卵
ブリオン

午後七時
梅生魚豆 午後七時
玉潮腐干汁粥

食箋第六十七

豆 午前八時
大根養老煮粥 午前八時
梅ふわ、卵干汁

午前十時半
豆スープ

豆 午後一時
魚養老煮粥 午後一時
梅糖分なき干泉凍粥

午後四時
豆スープ

午後七時
豆、肉、魚、物(但葛を用ひず)

食箋第六十八

湯豆 午前八時
梅生玉子腐干 午前八時

午前十時半
珈琲 (サクカリンにて味を調ふ)

梅蒸刺豆 午後一時
玉腐 午後一時
干汁身粥時

午後四時
豆スープ

午後七時
ちり(豆腐、魚、葉菜、茶)

食箋第六十九

豆 午前八時
生ビフゼリ 午前八時
梅卵干

午前十時半
豆スープ (又は紅茶)

豆 午後一時
梅生煮 午後一時
干汁附粥時

午後四時
鶏卵
ブリオン

午後七時
ちり(魚、豆腐、葉菜、松茸、茶)

午前八時
豆腐粥
卵卷
野菜清汁
梅干

午前十時
豆スープ

午後一時
豆腐魚落梅
玉卵
干汁酢

午後四時
ブリオン
卵
(又は鱧泉)

午後七時
肉燗
牛肉
豆燗
番茶
煎茶

午前八時
豆腐粥
金糸卵
梅干

午前十時半
豆スープ

午後一時
湯豆腐
鶏肉三倍
梅干

午後四時
豆スープ
(又はブオリン)

午後七時
牡蠣燗
大豆燗
鹿茸
澤庵菜

尙豆腐料理、鶏卵料理、肉類の料理はこの他に種々あるが故に、便宜に類似の献立を作り飽かぬ様續けねばならぬ、
第三度の糖病にあつても茲に掲げたる食箋に據つて食物を供して見て、病症の輕快するのを認め得ざる場合には、更に種々なる料理を取り替へて献立をなし、又米飯をも進め常に食慾を落ちざるやうになし、體重の増加を謀り病症の増減に注意して、若し烈しき症状

例へば煩渴又は昏睡の傾き等現る、場合には、時々第二度糖尿病の食箋によりて其影響を見、尙醫師より十分の手當を受けねばなりません、
最後に糖尿病の診断に就いて心付いたことを一寸述べて置かう、糖尿病でないものが醫師から糖尿病と名付けられ、狼狽して居る患者を屢見することがある、若し醫師が知つて故意に糖尿病と名付けたものならば、殺生と謂はなければならぬ、然し不注意の爲に誤診せられることも少くない様である、尿中に蛋白があるを直に腎臓炎と命名することの不當なるが如く、尿中に還元性の物質があつたを直にそれは糖である、糖尿病が潜んで居るのであると断定するのは甚だ輕卒である、還元性の物質は藥品を使用した結果尿中に出づることがあり、又美食した後には血液内で蛋白質が多く分解して、尿酸鹽類が尿中に出で還元性を現はすことがある、故に尿を検査してトロンメルの試薬や、ニランデルの試薬を用ひて輕度の還元作用を見た位で直に糖の存在を推定してはならぬ、然るに此間違は臨床上稀ならず或は故意に或は不注意に因つて起こされて居る様に思へる、若し還元性の物質が果して糖であるか否かを知らんと欲せば、エミルフイツシャアの検査法を行へば、ヒドランと糖と化合してオザツオンを形成するに因つて、容易に判断することが出来る、のみならず此間違を起こされる尿は外觀から既に糖尿病の尿と異つて居る、即ち熱病や美食の

結果に因つて起る場合が多いから、其色が濃く放置するか寒冷に遣へば屢煉瓦石様沈渣を起す之れに反して糖尿病の尿は色は淡くして水に近く、其量が多きを特異とし、振盪すれば泡沫を生じ、比重を計れば豫想外に重く、蟻の居る所に振りまけば蟻が集まり寄るものである、又經驗のあるものはトロンメルの反應やニランデルの反應を行ふ場合にも容易に見分けの付くものである、

第九節 神経系統の疾病

第一 神経衰弱症

神経を過度に使用して疲勞さす本病が起る、即ち神経の過勞のみが本病の唯一の原因であるを考へるのはあやまりである「神経を休めたら本病が治る」「業務を廢したならばよい」「神経を使用するな」と勸諭して能事足れりとして居るのは更に大なる過失である、成る程肉體精神或は資産に就て分に過ぎた職務を營み、或は以前は分限相應であつたが、或事情の爲めに分に過ぎるやうになつて、精神を疲勞さし神経衰弱の起るこゝのあるのは無論であるが、然し斯の如き場合に業務のみを抛たしても功力はない、また精神を使ふなと命令した所で、人間目の覺めて居る間は精神は使用すまいと思つても、精神は自分で動き始

むるのである「職務上の事も考へるな」「家族の事も考へるな」と言つても、其を考へなければ身の上の事を考へるやうになる、最後には自己の健康のこゝを考へるやうになるのであつて、命令する人の希望する「精神を使用せぬ」と云う事は到底出来ぬのである、若し財政上の事が精神を疲勞さした原因であれば、資金が最上の適薬ではあるまいか、戀愛が病の真相であれば、添はしてやるが最良の方法ではあるまいか、職務の負擔が重過るならば、其分量を減じて分相應力相應にするのが、手近き救濟の道ではあるまいか、道は近きにあり之を遠きに求むの愚を學ぶに及ばぬのである、既に總則で八益しく述であつた通り、食物も興味を以て食べ、肉體精神も興味を以て使用し、而かも何事も秩序があつて分を越さぬと言ふことが出来て、常に信念を持つて業務に従事して居れば、神経衰弱なきは起らぬ筈である、只物事に秩序が亂れ、分限を越し、殊に興味を失うと云ふことが、必ず悲觀、不運、失敗引ては亦神経衰弱の原因となつて居ると言はねばならぬ、故に神経衰弱の治療には秩序と云ふ事、或は分限と云ふこと、或は興味と云ふ事を處方する如く、處方せねばならぬことがある、

所で神経衰弱の原因は何も精神を過度に使用すると云ふことのみではない、煩職に居る人でなくとも、又他より看れば何不足ないを想はるゝ身分の者にも神経衰弱はある、往昔、

ピシニアの王子ラセラスは神經衰弱に罹つた、妹の王女や御氣に入りの能者が王子は何も不足の事物はないのではありませぬかと御諫め申上げた、所が王子は「某不足の無いと云ふことが不足である」と答へた、誠に道理のことで、希望がなければ興味が生ずるものである、何の都合に於ても神經衰弱の患者には興味と云ふ事が缺乏を起して居ることを認める、愉快を感じしむるには時として一定の苦痛をも處方せねばならぬのである、アピシニアの王子は遂に離宮を脱れ出で、未だ知らざりし浮世にさまよひ、艱難辛苦を嘗め、始めて自分の分限を知り、再び離宮に還つて幸福を樂むことが出来たのである、分を知れば足ることを知る、満足する、愉快を感じる興味を生ずると云ふことになる、如何なる人でも分を知らぬと煩悶する、煩悶の結局は杞憂に陥ることもある、益興味と云ふことを失ふことになる、それで身軀の何の部分にか、何か或病氣がある、病氣の本性を識つて適當の養生をして居る、即ち人事を盡して天命を俟つて居るものである、自覺することの出来るものは、病氣であつても所謂「足らず事足る」と云ふ、即ち分八合に満足すると云ふことが出来て、正しい養生をするに張合があつて、興味と云ふことを失はぬが大抵はそう行かぬもので、所謂病を識らぬ云ふことは疑惑の念を生ずるか、或は杞憂の念が起り、神經衰弱に陥るもので、御氣の毒ではあるが、大抵の病人は軽いと重いとの差別

はあるが、神經衰弱症を兼て居ると云はねばならぬ、故に本病に就て述べる所は亦大抵の病人が服膺して呉れることを望むのである、●健康な人でも病氣のある人でも、間違つた養生をして居つて、希望する所の目的地に達せず、即ち健康も良くならず、疑惑が起り、終に神經衰弱に陥ることのあるのは不思議はない、殊に一種の恐怖心又は特殊の判断に基いて不合理の食養生をなすものは營養不十分となり、或は自稱養生家の爲す如き消化し易き食物のみを用ひて居るものは、胃腸の抵抗力を弱くし、羸瘦若しくは胃腸筋肉の弛緩、便秘等を起し、口には天の恩寵に浴して居る如く唱へながら、内心は恐怖や疑惑やの斷間なき爲めに、神經衰弱に陥れるものが少くないのである、

亦「神經衰弱は教育の結果」であることがある、之は學生の神經衰弱症即ち所謂學生腦病を指して言ふのではない、學生腦病は今日の教育界の罪であつて、人材教育でなくて兵隊式教育を施す結果學生の腦力を過度に使用さすので、學生も有用に勉強をすることをせず所謂學校勉強惡口を言へば養勉強晝寝に如かずを覺らぬ學生の過失に基くものであるが、今茲に述べる所は家庭に於けることで、神經衰弱性の父母のすること、知らず識らず良きことこのやうに見やう見まねをする、即ち父兄たるものが何時の間ともなしに、子弟を神經衰弱症の患者たるべく養成して居ることである、之は自分が踏み迷うて行くだけよりも結

果が恐ろしい、深く種を蒔かれたものは、芟除し難きものである、又學生腦病に於けると同じく幼童子女に分過ぎたる課程を授け、只「早く知恵附かしめむ」「早く技能を習はしめむ」と急ぐ爲め、腦を過勞せしめ、事物に感動し易き過敏なる弱き腦を持たしめる様になることもある、故に何處までも分に應ずると云ふことが必要である、

神經衰弱症の原因中には又前に述べた通り、種々なる疾病が潜んで居ることがある、それは疾病の養生が其法を得ぬ爲め、次第に神經衰弱症になるのが大部分であるが、時としては病氣其物が神經衰弱症の原因であつて病氣其物は却て表面に現はれず、病人自身も醫師も之を見過ごし、後日後悔せねばならぬことが起ることもある、就中肺結核が神經衰弱症の假面を蒙つて出て來ることが頗る多いので、まだ熱も出なければ、貧血にもならぬ、食慾も落ちねば、咳嗽も咯痰も出ぬ、咯血もなければ、盗汗もなし、別に不安の症候は一つも見當らぬに、患者は陰氣になつたり、精神が過敏になつたり、不眠症になつたり、只神經衰弱症とより思へぬ場合が、醫師や世人が想像するよりも遙に多いのである、治療の方針を過てば一生の大事であるから特に一言して置く、

神經衰弱症の症候が高度になると、舉動言語にも節度がなくなり、食物も快く取り難く、貧血にもなれば、身體も衰弱し、感情も安靜なることが出來ず、夜も碌々眠られず、身を

悲觀し、世をも悲觀し、死を想ふに至ることもあれば、自殺を謀るに至ることもある、全くの精神病患者となることもあるものである、

然らば神經衰弱症になりかけ、或は既になつたものには如何にしたらば宜かる乎、それは前より述べ來つた所をよく考へ合せて呉れたらば、直に解決することが出來ると考へるが老婆心を以て例を擧げて御話をしよう、

患者は一醫師でありましたが、神經衰弱症の結果不眠症に苦められるやうになつて、大學へも入院し、高田耕安氏の東洋内科院へも入院したが、効驗が無かつたので、私の病院へ入院しました、病人の言ふのは、私は用ひて呉れる藥品が大抵判るから機能が少いので困ると、予は「自分が調合した薬でも出來上つた物を見て直に何々である」と指摘することが出來ぬ、果して貴君が予の處方を一々指摘することが出來るか試みて下さい」と答へた之は此患者に病氣に害ある事柄を考へさすまい豫防で、斯く患者の堪へ得る程度の事で精神の從事すべき事を與へて置くのは「精神を御使ひなさるな」「何も考へてはいけません」「と言ふよりは、餘程腦を安息さすことの出來るものである、翌朝になつて「昨日來の藥品は何でありましたか」と反問すると、多分何と何とであると思ふが、色と味とは全部感附くことが出來ぬと答へた、然らば昨夜は眠れましたかと問へば、少しく眠られたとのこ

とであつたから、然らば結構である猶今後共考へて御覽なさい、又落語の本を興へて此位のものには害がないから讀みなさいと諭した、其翌日になつて尋ねたら割合眠られたとのこと故、今度は講談本を興へた、其より病症の輕快するのを認めて、西遊記や藤栗毛を渡した、後には八犬傳や新聞の雜報を讀むことを勸めて、精神の從事すべき課定は藥品を調合する如く、予が一々指定しまして次第に分量を増し、易より難に入り、精神を漸次普通的生活状態に慣らしましたが、遂には呉れる藥品がほと分るなき、初に生意氣なことを言ふたのは全く忘れて、餘り長時日ならずして喜び勇んで治癒退院しました、

それから予自身が神經衰弱に陥つた時の經驗をお話しやう、それは予が歸朝する一年前のことである、國許より一本の手紙が到着した、予の父上が顔面の丹毒に罹つて病勢が危篤であるのを知らして來た、一丈餘の長き手紙に病狀を縷述した上、留守をして居る母と妹は最後の決心を定め、萬一不幸の出來た場合には如何様に處理しやうといふこと迄分別して報告し呉れたのであるが、其中程に唯一行父の手蹟にて「父が死ぬることも學業半途にして歸國することはならぬ」と記入せられてあつたのを見て、予は手紙を擁して骨肉の恩愛に感泣するを禁じ得なんだ、今日とは違ひ西非利亞鐵道があるではなし、亞米利加を經由して一刻一里を急いでも三十餘日を費やさねば歸省することは出來ぬ時である、況んや

が此手紙を書いた當日からは既に約四十日を経過して居るのであるから、予が手紙を受け取つて煩悶して居る其時には、父上は既に全快して居られるか、或は既に此世の人ではないのである、電報で知らして呉れぬ以上は、次の音信又其次の音信に接しても皆數十日以前のことを知り得るに止まるのであるから、果して生か果して死か、唯一つのみを知りたいと思ふても、徒らに數週日の後安否の分る迄は空しく焦慮するの外はない、然るに予の宅は四國の片田舎である、母も妹も父の側を離れることは出來にくいであらう、よし離れることは出來ても海外へ向つて電報を打つてか、或は他人に之を依頼することはなし得ぬであらうと思ひ悩み、折角父上が死を期して迄子を訓戒して呉れたのに關らず、學業にも手は就かず、終に神經衰弱に陥り、晝は茫然、夜は不眠といふ次第になつた、日中は又氣の紛れることもあるが、不眠にはホト／＼苦しんだのである、そこで初めは就眠前枕邊で小説本を讀んで貰つたり、頭部を冷水で冷して貰つたり、脚を按摩して貰つたり、或はビールを飲んだり、種々試みて見たが何れも次第に役に立たなくなつた、そこでトリオナ量を増し、試みたが、後には大量のモルヒネも藥力を示すことか出來ぬ様になつた、止むを得ず決心して温泉場に出かけた、フランクフォルトのかたほじりにホンプルグビ

いふ小温泉場がある、そこには、幸にも予が三四年前に一年餘厄介になつて居つたペンションの主人が温泉宿を始めて居るのを思ひ出して、尋ねて行たところが大いに歓迎せられて主人のいふには今はまだ晩春初夏の節で、避暑の遊客も多くない時であるから、室代も廉くしてあけることが出来る、別して舊知の間柄であるから、家族同様にして成る可く難用のか、らぬ様にしてあけることが出来る、なほ君の居る大學の産婦人科の助手をして居る方の許嫁の令嬢が家庭を作る準備まで、料理を見習ひに来て居るから引あはせやう、又料理はウエルツブルグで差上げて居つたものとは違つて、大陸料理の粹、醇の醇なる、自慢の御馳走をしてあけることが出来る、ミチャホヤ曰はれ、妻君や老母も旅から可愛い息子が孫が歸つて来たかの如くもてなしてくれ、例の令嬢は其未來の夫に予の事を知らしてやつて、其返事に自分の朋友であるから、特に懇親に待遇せよと命ぜられたとかいふので、萬事氣をつけてくれた、温泉場構内には娯樂の設備は完備して居つて、勝手遊戯が出来る様になつて居り、晝は數回宛の最良の音楽やら茶番などの開演があり、夜は光學利用の噴泉の奇観やら種々なる火技やらの催しがあり、舞踏會もあれば假裝會もあり、近郊の深林丘陵には閑境幽逕逍遙して倦くことを知らざらしむるに云ふ状態であるから、予の病症は次第に輕快して、三週問程の後一應宿の主人に勘定をして貰つた所が、囊中自

ら空しいいふことになりか、つた、まだ少々残れる間に其より方針をかへ、フアルケンスタインの療養所や、ギーセン、マルブルグ、イエーナ、ハルレ、ライプツヒ、エルラング、ミューンヘンなどの大學や、ニールンベルグの病院や、ナウハイム、カル、スバード其他の温泉場や、ツアイヌの顯微鏡製造場等を參觀して、ウエルツブルグへ歸つて再び講堂や研究室へ出るやうになつた時、一二の師匠から永らく出て來なかつたではないかと尋ねられ、ホンブルグへ保養に行つて居りましたと對へたところがオヤマと驚歎せられ「自分等も一生の中には一度さういふ處へ保養に行つて見たい」といはれた時には何のこともか子には分らなんだが、後に聞くところによると、ホンブルグは一小温泉場であるけれども、有数の贅澤温泉場であるといふことが知れた、僅三週問位の保養に三四ヶ月分數百金の學資がライイになつたのであるから、之に驚いて病魔が退散したものとはいふてもよい程なく郷里から父君の病氣全快の好報に接したので、予の神經衰弱も永久に治癒して終つた、然し其時からは両親や妹が矢鱈に戀しくなつて其後は一年程しか辛抱が出來ず、僅にハイデルベルグの大學、エンメンディングンの精神病院、ストラスブルグ、フライブルグ、ウキーン、ブラーグの大學、ドレスデンの病院、ペルリンの大學などの參觀見學の周遊旅行を済まして、終に十年計畫を一抛して、一先づ中途歸朝したのである、今日予が淺學の講

勝を受くるならば、それは慈親と唯一人の妹の好意を無にした罪である。自覺して居る、唯子の誇るところは今日七十餘歳にして父君の猶ほ嬰孩たること、母上も妹も餘慶を受けて予も亦共に頑健なる點である、又自宅治療の患者で胃擴張と神経衰弱症の爲め、年中醫藥に親んで居る一富家の若主人を診療したことがある、さうも治療の効が顯はれぬので、注意して見るに戸主ではあるが養嗣子となつたもので、性質が篤實で富貴よりも平和を望む者で、而かも平和が時々破られるか、かかることあるのを發見した、色々方法を盡した結果止むを得ず、裁判所へ隠居願を出した、聽許せられた、合意離婚の訴訟を出した、同じく聽許せられた、そこで兄の宅へ歸つた、段々快方に趣いたが、も一つ思ふ坪にはいらぬ、そこで其兄へ談じて嫁を貰はした其兄も至極の弟思ひの人で、旨く予の治療の方針を助けて呉れたので、予は今に此人に感謝の意を表して居るが、今一つ都合よく行かぬので無論段々ではあるが別家をさせ、次ては商業を営ました、幸ひに子供も出来る、子供に不幸もあつた、悲もあつた、又喜びもなかつたではなからう、一家の家長になつたのではあり商業をして居るのであるから責任も出來た、責任に對する肉體及精神上の報酬も来る筈である、斯の如くして遂に全く治癒しつしまつたのである、此例によつて見れば慰安と共に苦痛や責任を處方することも又必要

な場合があることが判然ししやう、

又一例は或商家の二男で陸軍で看護卒を勤めて居つた、除隊せられて後神経衰弱症の結果殆んど精神病の状態となつた、又事實一時京都の府立病院で精神病の病室に收容せられた、予は此病人の輕快した時を見計らひ妻君を貰はすやうに勸告したが、此父君は昔氣質の堅實な人であるから、精神病者に誰が嫁に来るものがあるものか、又部家住で別に宅も資産も分けてなきものが、人を迎へることなきが出来るかと聞き入れそうにも無かつたが、三年越説法した、先づ家屋敷を拵へ財産を分ち、着實に配偶者を索めたが、縁あつて結婚が出來た、今日では此患者も餘程輕快して父兄の心配を軽くして居る、斯の如く高度の神経衰弱症であつても、先づ興味と云ふものを興へ、秩序を立て、行けば成績の擧がらぬ筈はないのである、尤も分と云ふことを考への外に置いてはならぬ、語を換ゆれば場合相應各人各個に就いて最も良き方針を立てねばならぬのは申迄もないが、之よりも大切なるは醫師と治療を受くる者と歩調が揃はねばならぬことである、氣合がシツクリ合はねばならぬことである、之は本病に限らず何病にも同一である、繁職に居る人の神経衰弱症には先づ業務を輕減することを御奨めする、其でもいけぬと思ふものは海の旅行か陸の旅行をして、名所舊跡に遊び景色なり史蹟なりに就て腦を使用さ

すがよい、茲に引用するのは誠に恐れ多い次第であるが、

明治天皇陛下の御製に「旅」

四百三十六

と題せられて

旅にあれば物は思はずこ、かしこかはる景色に心移りて
とあります通り、過度に腦を使はすことや胡思亂想を起さすことを避けることが出来、又
氣を轉じさすことも出来、結局精神を使用させぬと云ふ眞の目的は大抵達せられ得るので
ある、其でも好結果を得難き者は入院するが宜しい、所謂高等木賃宿の官公私立の病院へ
無意味の入院をするのであれば何の役にも立たぬ、無論學識と同情ある醫員より一々精神
的課業の處方を授けて貰はねばならぬ、成るべく今迄に精神を勞した同一の事項に關して
腦を疲勞さしてはならぬのである、其他機宜に適する様に治療の方針を定めて貰はねばな
らぬことは申迄もない、

静養と稱して急に轉地したり、或は温泉行をしたり、輕快を覺へたと云ふて直に舊位置に
復したりするのは、事物が餘り突飛過ぎてよくない、神經衰弱は神經を休息さして全治す
るものでない、再び過勞すれば又衰弱を起す、贏ち得たるものは何ぞ、治つたり悪くなつ
たり、遂に疑惑に陥ると云ふのみである、神經を強くするのは先づ其當時の能力の八分目
に働かして餘力を養ひ、次第に困難なることに堪へ得られるやうになし、常に能力の八分

と云ふことを守りながら精神を使用する度を進め、舊時の状態に達しても能力の八合と云
ふ状態を保ち得るやうに行けば、更に困難の職務にも堪へ得るやうになるので、之を
全治と云ふのである、

不運に遭遇した人や、失敗に遇ふた人には、實行が出来ぬと非難する人もあらう、而して
も實行が出来ぬことはない、分限を知つて呉れたら良いのである、分限の八合より新に始
め直して、舊状態に歸るやうに秩序を立てたらよい、氣を落すからいけぬのである、氣を
落せば張合、語を換ゆれば興味がなくなる、故に興味を常に持つて居ると云ふことが大切
である、出来ぬことを望むに及ばぬ、朝に道を聴いて夕に死すとも可也、今日自分の出来
る能力の八分を盡せばよいのである、之で天職が盡せて居るのであると愉快を感ずべき筈
である、興味は新境遇に於て新興味として顯はるべきは何も論を俟たぬ、實行が出来ぬな
き、拱手して居るものは、固陋の舊思想に拘にせられて居るのである、耻づるに及ばぬこ
とを耻かしく思ふ復我慢である、それで、能力が減て居るに体裁のよいことがしたい、即
ち猶能力の十二割十五割を使はうと思ふのである、猶過勞がしたのであるとの反駁は受
けねばならぬ、こゝに於て躊躇逡巡するなかれ、必ず分限を知れ、分の八合にせよと戒め
ねばならぬ、即ち斷の一字換言すれば英斷果決と云ふことも處方せねばならぬ、これから

四百三十七

先の實行は前に述べた通りであるから、別に繰返すには及ばぬ、種々なる病氣が原因で神經衰弱症に罹つて居るものは原病に就ての適當なる養生法を守り病を識り、分を知り、茲にも新興味を以て秩序を亂さず實行すれば、茲に説く本旨を失はぬのである、

非合理的食餌攝生を正しきものと心得て、之を墨守せる神經衰弱症の患者にありては、正しき食養生を説き示して患者を得心せしめ、興味を以て食事に望み腹八合に食せしめて、食事に對する餘力あらしめ、飲食物の分量及び時間などにも不自然なることなからしめ、健康者の食養生とする食餌を以て營養を補給せしめねばならぬ、若し誤れる食養生の結果全身なり胃腸なりが既に一程度迄衰弱せるものに在つては、むしろ美味なる容易に消化し得べき食品を比較的少量に給與し、且つ漸次其量を増加するか、或は回数を増加して營養の快復を計らねばならぬ、若し又患者が以前主に肉食を習慣せざるものたるを認めたらば、植物性の食品を比較的多く用ひたら効能の多きこともある、要するに百の説法よりも一個の證據を以て患者を得心せしむるに加かず、止むなき時には一時患者のなすが儘に放任し知らざる眞似をして患者の行ふ所の缺點を觀破し（隣室或は天井の一隅より隙伺の出來るやうにしてもよし、之を觀察療法と名付け精神病の治療には必要なるものである）其缺點

より改善を加へ、最後の手段として他を顧みるの必要なく患者の營養を快復し、其體重を殖し、如此體重を増加したり、如此健康改善したりとの證據を見せ、患者の心服するのを待つて、正規の食養生を守らしめ、本條に説くところの主義を貫徹しなければならぬのである、即ち信念と云ふことも處方せねばならぬのである、

第二 歇斯的里

歇斯的里の症候が進むと、感情や觀念やの變調を來すばかりでなく、肉體上にも論理で豫測の出來ぬ、状態が現はれることがあるもので、胃に著しき變化がなくて猛烈なる嘔吐が起つたり、吐血したり、胸に別狀がなくて頑固な下痢や、頑固な便秘が起つたり、肺に異常なくして咯血したり、喉頭は健全なるに音聲が全く嘶嘎したり、言語を發することが出來なくなつたり、五官器に異常がなくて所謂精神官、精神變、嗅覺脱失、味覺脱失、其の他五官の機能の變常を起したり、身に及物を加へて出血するも少しも疼痛を覺わなかつたり、身軀が蠟細工の如き状態となつたり、螺旋彈條入であるかの如き状態となつたり、或は手、腕、脚、足を動かすことが出來なくなつたり、其他千態萬狀を呈するものである、精神の方も感覺や、感情や、觀念聯合の錯誤位に止まらず、次第に變調を起して全くの精神病となることがある、就中鬱憂狂や偏執狂となることも少くない、

處で世人はヒステリー患者を遇するに、我儘氣儘で色々の事を言ふて居るのである位に誤想して、患者と苦を分つて云ふ情愛は更になく、「復神經が起つた」「それは神經だ」など一口に云ひ退け、醫師に向つても「先生ヒステリーでしょう」「先生神經でしょう」なき、復例のかと眉を顰め、病人が自分で症候を現はして居るのであるから、我儘氣儘さへ慎めば症候も自分で無くすることが出来る様に考へて居るものが多い、醫師も大勢に反抗するを不利益であるでも思ふのか、ヒステリーと云ふ名をつけるのを憚り他の病名を與へるか、或は歇斯的里と命名しても懇切に病氣の性質を識らして、病人には其缺點のある所を自覺せしめ、得心して養生をなし、功果の現はれるを見て、益々適當の養生を守り回復せしむるやうにしてやり、家族には病人に同情を寄せさせ、醫師と共に患者を補佐して全快を早からしむる方針を取らせること云ふ様な、骨折を借まぬものは乏しい様に考へられる、つまり藥代や診察料になること以外には、餘り勞力を費やさぬやうに思はれる、何れにしても歇斯的里の治療には眼目でなければならぬ「同情」と云ふものが、大抵の場合には缺けて居るのであるから、病人が敬服しそうな道理がない、親切にして呉れても何れも附け上りもせぬのに、親切どころか反對に冷笑せられて居るその反抗心を起し、周囲は病人が嘘でも言ふて居るやうに待遇するけれども、自分には嘘を言ふた覺へがない、氣儘

氣儘をして居るのでないと思ひ居るから、口惜しくなつて病根は益々増加することゝなるのである、故に歇斯的里の治療には「親切」と云ふことは殊の外大切なものである、又氣を他に轉ずると云ふことも随分大切なものである、予は例を擧げて説明の足らぬところを補はふと思ふ、予の開業の始めであつた、十六七歳の少女が水より他何物を食しても嘔吐する、そこで絶食が二ヶ月の上になるが、絶食のことも何れの醫者も嘘だと云ふて取り合ふて呉れぬ、のみならず苦痛と心配は捨て置かれぬのであるから、一應診察を請ふと云うて出て來た、予は學理と實驗上で絶食は二十餘日位は辛うじて行はれ得るものであるといふことは知られて居るが、若し貴女の云ふ事が眞ならば一新例である、が醫師に向つて病氣を癒して貰いたいと思ふものは、少しも隠す所があつてはならぬ、と告げて既往の事を嚴重に調べたが初御飯が食られぬやうになつては餓餓を食て居つて、餓餓が食べられぬやうになつては煎豆を食て居つた、煎豆が食べられぬやうになつてからはと云ふて、口籠つて居つたが、嚴格に尋ねたところ、澤庵を喰つて水を飲んで居つたと對へた、水より外何物をも喰ぬ様なつてからはと問へば、やはり二ヶ月と對へた、或は試みに何か喰つて見ても嘔吐したものであるから、何にも腹の内へは殘らなかつたと想ふたのであるかも知れぬ、而し一旦二ヶ

月何にも喰はぬと明言したものの故、前言を固執したのかも知れぬが、兎に角長き絶食であつたには相違ない、患者を綿密に検査したが、一方の眼球は小さく見へそれで瞳孔は散大して居り、虹彩に缺损があつて、他方の眼球は大きく見へそれで瞳孔は縮小して居つた、血液を調べて見たら赤血球は緋鏡状をして居らぬ、赤血球の色も淡い、尿を調べて見たら尿の比重は甚だ軽く殆んど水と異らぬ、大便を調べて見たら蛔蟲の卵があつた、そこで驅蟲藥を與へて見たが、病人は藥を貰らつても吐きますからといふて持つて歸らうとせぬ嘔氣を止める藥を入れて置くから、よし吐いても一部分は體內に残る、是非飲んでみよと命じて、或一品を加へて患者に二分の藥品を授けた、ところが二日経つても來ぬ、三日目に出て來たが、「貴女の身體には猶澤山に檢べるころがあるから、後へ廻つて呉れ」と諭して、午後の一時頃迄に他の外來患者の診察を済ました、其少しく前に患者は首を垂れ、疲勞の態が見れたから、辛度ければ寢て待つて居よ、と隣室に臥床を伸べて與へた、之から此患者を診察しやうといふ時になつて、恐ろしい全身痙攣が起つて來た、取敢へず要慎して利くか利かぬか程の少量の鎮痙藥を注射した、痙攣は次第におさまつて來たが、容態が變に變つて來て呼吸迄が止つて終つた、狼狽して興奮藥を注射した、呼吸は戻つて來たが、又次第に痙攣が現はれて來た、恐くなつて藥を用ふることは止めて思案して居たが、

痙攣は次第に衰へて再び絶息した、直に人工呼吸を施して蘇生せしめたが、不安で堪へられぬから、患者の傍に布團を敷かし身を横へた、呼吸が悪くなるに直に立つて人工呼吸を施した、夜に入つてより朝迄の間に五六回も驚いて立上り、人工呼吸を施すの必要があつた、翌日は朝の診察が忙しかつたが爲め、忘れるにはあらぬ、此患者の事は自然おろそかに成つた、外來の診察が終つた時ハツと思つて此患者の事を聞いたが、幸に午前中には變つたことがなかつたので胸を撫で下した、午食が済んで患者の處へ行つて見るに痙攣が起つて居る、然し最早心配はせぬ、前日來の事を靜に考へて見る、患者の手は常に自分の枕頭へ來て居つた、之は予が常に第一番に脈を觸れてみる、一定の關係があることを發見した、そこで痙攣の止んで來た時に直に患者と談話を始めた、貴女は始めて予の宅へ見れた翌日か翌々日に何か變つたことが有つたに相違ないと尋ねたら、實は便意を催して圓へいた處が、胆飴玉の如くなつて蛔蟲が下りた、之を見て全身に冷水を注けられた様に覺えて、室内へ歸つた迄は覺えて居るが、後で聞いたならば劇しい痙攣が起つたそうでした、それで昨日診て貰ひ申しに出やうとしました時にも、母は之を止めて申しまするには、あの先生は學問はあるか知らぬが、實驗はまだ浅い、和女の病氣が少しでもよくなつたのなら行て診て貰つてもよいが、現在悪くなつたのだから、あの醫者は思ひ

断つたがよいと制せられましたけれども、あの先生に診て貰つてならば死んでもよいと云ふて來ましたので御座りますとの答であつた、後日考へて見るに此談話を始めたのは患者の精神を他に轉せしめるのに非常に都合であつたのである、此時迄は眼の方の變化から推察して、腦にも先天性の異常があり、所謂ジャクソン氏の癲癇に近きものではないかといふ疑があつたが、それは誤りで、ヒステリーであるといふ確信が出來た、そこで田舎で調ふ丈の種々なる飲食物を拵へ、せれからでも箸を付けよと命じたが、患者は嘔吐が起るといふて拒んだ、予は此時食はすのは自分の役、吐くのはお前の勝手である、之から二人が根比べをするのだと言ふて、規那煎稀鹽酸の處方を與へ、水は一滴も飲むことはならぬと禁じた、一時患者は水を呉れねば自殺するといふが、予は頓着せぬ、此時は幸ひに往診を一切断つて居つた時であるから、午後には此患者に付き切りになつて、患者に少しのたるみをも許さなかつた、始めは随分よく吐いたが、一週間程の後には大抵のものは割合よく治まるやうになつた、斯様にして全治迄に導くことが出來たが、其後半年許して予が洋行するといふことを聞いて、此患者は再び悪くなり始めた、予は自宅に居らなかつたが此事を聞いて歸宅し患者を呼び付けて數々に譴責して、予と膳を並べて食せしめ、健に食物が食べられると云ふ信念を與へた、此患者は其後再發することなく、今は人の母となり

家庭の主婦である、然るに其妹が予の留學中に姉と同じやうな病症を起し、松本先生が日本に居られるのならば姉と同じく治療さして貰へるのに、歎息して居るといふことを手紙の端で讀んだことがある、ヒステリーも家庭で教育せられることのある善き例であるといふも思つて居る、

「親切」が本病の薬といふてもよいことは前の例で明かであり、又「氣を他へ轉じる」といふことが少からぬ効力のあることも略推測が出来るで有らうが、更に一例を擧げて深切許りでなく、治療家の手腕をも要し、機轉と忍耐の肝要であることを示さうと思ふ、患者は七十許の老婦人で、豫て常習便秘、腰痛、偏頭痛即ち頭の半分が發作性に強く疼む病氣に悩んで居つた、予は此老女の家に下宿して居つた、患者の家族が松本さん此病氣に温泉は障らぬでありませうかと問はれたことがある、害がないと答へた處、頻りに温泉の効能を穿索して入浴して居つたが、効がない、又灸は害がありますまいかと尋ねた、然りと答へた、處がねらい自慢のある先生を呼んできて、隣の部屋で醫者を糞糟の様に言ふて、方角から日時、點の急所、据へ方、艾草の選び方、据へた後の灰の据へ場所など、縷々効能を述べたて、毎日やられるのには當てられた、のみならず随分むかつかされた、ところが之も餘り効能が見ぬので、或日神信心をしては如何でありませうと質問せられ

た、この方法でも治つたら本人の幸福であるからと思つて別に反對せなんだ、ところが病症は次第に増悪して眩暈の發作が加はつて来た、深夜目が廻うといひ出し、それから落ちる落ちる地の底に落ちるとわめき、當家の主人即ち患者の息子の身體にしがみつき、家中騒動して目を覚めさせられることが毎晩になり、後には夜中二回も三回も安眠の妨害をせられることがあるので、眩暈だけでも止める薬を調合してあげやうかと親切で云ふてあげたが、家族のいふことが手厳しい、斯ういふ事を辛抱しなければ病氣が全快せぬと云ふ、御神諭である一本で四まされた、其間予は斯る病人を治療する最も良き方法は何ういふものであるかと色々研究して見た、終に患者が病氣は如何しても醫者でなければならぬといふことが悟れましたから、何分頼むと申出た、其時に予は一言の下に拒絶した、再三頼まれた時に市には病院もある、知名の開業醫もあるから、醫者が必要であるならば相應の人をお選びなさい、又予が頼んであげてもよろしいと答へた、ところが病院や市内の醫師に診療を受けて居つてから、結局今日の状態になつたのであるから、何分あなたに御工夫に信頼するといふた、けれども醫藥に全く頼らぬといふのも何であるから、間に合はせに予に診て貰つて置かうといふ考へで有らうと想像したから、やはり判然謝絶した、猶ほ二日も三日もくきかれたものであるから、最後に予の命することは一切背かぬ、予の施す手

段は中止さす様のことはないか、それを先決問題としなければならぬ、まあよく考へて置きなさいと易々と引受ける態度は示さなかつた、談判の結果治療を始める時臭刺と沃刺とを處方した、藥劑には重きを置かぬが當時の風に倣つて致方なく使うた、之から日に二回位時刻を定めて患者を起しに行つた、痛い痛いといふ叫んだが、そんなら止めませうかと尋ねると、顔をしかめて辛抱した、又脚を屈めたり伸したり繰返したが、同じく痛い痛いといわめく、同じく中止しやうかと不満の色を示したところが、同じく辛抱した、斯様にして幾日かを過ぎた時に、だいぶん辛抱がし易くなつた、突然「眩暈は如何になりました」と尋ねたところが、「アーほんに二三日も眩暈の事は忘れて居る嬉しい事である」と始めて快心の色を表し、愁眉を開けるを見る事を得た、時恰も初春であつたが日光當のよき機端まで匍匐さし、少時日なたほこりをさせて後、族に介抱させて褥中に送らせる様にした、それから後は餘程容易になつた、患者が柱につかまつて立つて試ては如何であらふ、壁を傳ふて歩いて見たら如何であらう、他人の肩にすがつて歩いてみては如何であらう、と漸次質問する様になつた、よき頃を見計らひ段々許して行つたが、一二ヶ月の後には幅廣い帯がしたい、屋敷の中を散歩してみたい、お寺參詣がしたいといふ様に、順次希望と注文とが出る様になつて、遂に全治するに至つた、

此例に因つて見れば又醫者には威厳と信頼せられるところがなければならぬといふことがお分りになりましたでしやう、

予の留學中恩師ロイ先生が、全身不隨と成つて飲食物迄他人に喰はして貰つて居つた一女子を講義に出して、種々なる方面より論及して、其ヒステリーであらねばならぬことを診斷した、其時師は我診斷にして過らば、三日の中に本病を治癒さすべしといはれた、果して其通りに實行が出来た、それより一ヶ月程を経て同様の一患者が入院した、此兩人を並べて講義に出し、推理の結果同一の病氣であらねばならぬと斷案を下した、其時は斷にして過り居らば、今回は三日と云はず、此時間内に運動不隨を治癒さして見やうと論じ、處置を始めて或現象の現はれし時、よしモウあは君達で出来ると隣室に寢臺をやり處置を續けさし、御自身は一方の快復せる患者に就て、其何故に治癒せしかを笑聲歡語を以て高々と講義を續けて居つた、時間の盡きんとする時、人を遣り結果は如何であるか尋ねさした處、結果は上出来である、正に直りましたと歩きまして講堂に現はれた、二人の患者は喜んで互に手を携へて病室に向つて去つた、何たる一場の神祕劇であらう、予も威信が出来技術も巧妙となつて、師匠に劣らぬ様になりたいた念願して居るのである、食餌に就ては一々患者の體質と疾病の有無既往の疾患を調査し、總則に述べたところの士

旨に反かぬ様に實行せなければならぬのは論を俟たぬ、又神經衰弱症に於けると同じく、最後の要訣は強壯療法に在りといふことを忘れてはならぬ、

第三 癩 癩

癩癩には前驅期が有つてから、正氣を失ひ、打ち倒れて全身の癢癢を起し、少時すると復再び快復して正氣にもさるものである、之を癩癩發作といひ、月に一回又は二回位起るものもあり、或は毎日起るやうになるものもあり、夜中起るものもある、此發作の起る時頭部や身體に外傷をしたり、或は舌を嚙んだりすることがあるから、成るべく患者一人で危き處に居ることのない様にしなければならぬ、

本病と食物との關係をいふて見ると、餘り空腹になつても、又餘り胃腸が膨満してもよくなし、殊に血液が濃厚になりたり、或は腦の方に充血をして上衝させたりすることはよくないのであるから、酒類であるとか、興奮性の飲料であるとか、過度の肉食をすることは避けねばならぬ、成る可く淡泊なるもので相當營養價のあるものを、回數を分けて一回には中量より以下を食べるやうにして、常に中腹であるやうに心掛けるのが必要である、山椒、胡椒、山葵、生薑、茗荷、蕃椒、芥子、蓼なきの如き香味料は使用せぬがよい、

且つ酒精飲料を用ゆる時は、他の神経疾患に於けると同じく其發作を振興し、特に平素酒類を用ひて居つては常習性癲癇となる虞がある、況んや酒客の子孫には能く本病患者を出すことを見るものであるから、酒は何れの點よりするも廢するがよい、

飲食物は多く肉類を使用するよりも植物性食品を撰擇するが宜く、普通の野菜料理よりも牛乳がよいのであるから、粥や軟き飯と共に牛乳を主食物とし、消化し易く植物性食物を料理したるものを副食物とし、時々動物性食品を交へるがよい、牛乳を用ゆるにも珈琲紅茶などを餘り並用せぬがよい、

夜中發作が起る場合には、家族のものも介抱人も油斷することが出来易いから、注意して豫防せねばならぬ、睡眠の初期に發作の起るのは夕食を多食せる時に多い故、夕食は成るべく早く攝らしめ且淡泊なるものを中量に用ひすがよい、早曉眠より覺めんとする時起るものには、夜中少量の食品を用ひしむれば、往々之を防ぐことを得るもの故、就床の際に牛乳などを枕邊に用意し、患者自ら夜中一定の時に食用せしむるがよい、或は葛湯、柯々阿、生卵、果物より作りたる消化し易き飲料などを用ひしめても宜い、早朝醒覺後平臥の位置より直立位に移らんとする時起るものは、既に褥中に於て一定の食物を用ひしめ、尙二三十分間床中に止まらしめ、然る後徐に起き出でしむるがよい、

癲癇には癲癇發作を起さずに、其代りに精神朦朧となり夢の如き生活をなし、覺めての後には自分の爲せしことを少しも知らぬこともある、之を癲癇の朦朧状態とも夢遊状態とも云ふのであるが、随つて癲癇發作が起らぬからと云ふて、家族や介抱人は注意を怠つてはならぬ、

又五官器に錯誤したる感覺が起つたり、或は事實無きものが見へたり、聞へたりして、終に妄覺性偏執狂に陥ることもあるものであるから、本病の養生は決して、疎にしてはならぬ、

健康であつたものが癲癇發作の眞似をして、遂に自ら癲癇發作を起すやうになることもある位であるから、元來精神の強壯でない癲癇患者の精神上の取扱も大切なることは論を俟たぬ、成るべく精神の平靜を保たすやうに計らひ、尙進んで精神を強壯にする方法を講ぜねばならぬ、

第四 腦脊髄膜炎

結核菌に因つて起る結核性腦脊髄膜炎は割合多いものである、又メニングゴックスといふ微菌に因つて起るものや、原因不明の流行性腦脊髄膜炎があり、又化膿性微菌に因つて起る化膿性腦脊髄膜炎といふものがあり、其他インフルエンザ、肺炎、ペスト、膈室扶斯、其

他の病原菌に因つて起るものもあるが、此等は皆原病の名を冠して名付るのである、そこで本病には如此種類も多く、全く不治のものもあり、治癒すべきものもあるが、兎に角病原のあるものは其方の養生を怠つてはならぬ、又何れにしても高熱のある場合には熱病の條下で述べた所を参照して養生して貰はねばならぬのである、特に御奨したい治療法は脊髄穿刺術である、

第五 腦出血

本病は腦の中の血管が破れて腦中に出血するものであるが、其出た血液が都合よく吸収せられて痕跡もなくなつたものは全治するのである、然し此出血する場所は多く腦の大切な部分で、腦の實質は軟なものであるから、出血した時に破壊される場合が少くない、其部分が全く修繕せられぬと、それだけの症候があつて残る、之が即ち中風である、若し又出血の量が餘り多いと腦卒中というて其儘死に至るのである、腦出血は平素酒類を多く用ひて居つたものとか、胡椒、山葵、蕃椒、芥子、生薑などを愛用して居つて動脈硬化を起したものの、或は梅毒や腎臓病で血管が悪くなつて居るものに多いのであるから、平素酒類や嗜好品を亂用せぬ様に注意せねばならぬ、又梅毒や腎臓炎の養生を嚴重に守つて、前以て豫防の道を講じておかねばならぬ、

腦出血は突然に起ることもあり、急に重きものを上げ様とした時、急に寒冷に當つた時、熱き湯に入つて上衝した時、立腹したり、ものに驚いたりした時、便所で撃責した時、或は咳ぎ入つた時、或は固きものを咬切らむとして齒に力を入れた時等に起ることがあるから、腦出血の虞ある病人は平生より急に變ることは何事でも避け、精神を平靜に持ち、身體を劇動せず、咳嗽や便秘は常に直して置き、食物も餘り硬きものを用ひぬ様に、殊に常に便通がある様に工夫をなさねばならぬ、可笑しき話であるが食塊が咽喉に塞つて、目を白黒して死んだとか、中風になつたとかの例もあることであるから、餘り大口に物を食はぬ様に、又餘り忙しく食事をせぬ様にせねばならぬ、又腹部の膨滿することもよくないものであるから、風氣を醸す様な食物は用ひぬがよい、

又腦出血小發作と名付けて前驅のあるものもある、御飯を食べて居つて箸を取落したり、或は他の機會に眩暈が起つたり、或は脚の力が急に減じた感覺のあるなど、いふことがあつたら、成る可く速かに床に就て安靜を守り、消化し易き流動性のあるものを用ひる様になし醫者に相應の手當を加へて貰つたら、其儘大出血を起さずに止むこともあるもので有るか、要慎せねばならぬ、

既に腦出血が起つた時には數時間或は數日間人事不省になつて、食物を攝ることも與へる

こども出来ぬ様になる、此時には極くの安静を要するものであるから、頭部に氷嚢を置き舌唇を湿ほす位に止め、肛門より食鹽水の注入をなす位にして、他は醫師の治療に俟たなければならぬ、患者が正氣に復り、ほつほつ食物が攝れる様になつたら、初は小米片を與へ、重湯、牛乳等を少量宛供給し、漸次種々なる流動性の食品を與へる、餘程よくなつて來たら半流動性、半固形等第一食より第二食、第三食、第四食と順を逐ひ、通常の混合食に移らしめてよい、

腦出血を起した患者は屢々便秘を伴ふことのあるものであるから、果物や野菜を適當に料理して應用する必要がある、然し一旦本病に罹つたものは全快の後と雖も不消化物を用ふること嗜好品を愛用すること、暴食すること等は嚴禁せねばならぬ、

第六 脊髓の諸疾患

脊髓癆は随分多い病であるが、此病氣では胃性發作と稱へて非常なる腹痛や嘔吐の頻發を來すことがある、此場合には食物が全く攝れぬ様になることもあるが、幸ひに長時日間斷なく續くものでないから、刺戟性のない流動食を與へ醫師の治療の効を奏するを俟つがよい、
結核性椎骨炎も亦随分多い病氣であるが、醫師の治療に因つて椎骨の相互に磨滅するを防

ぎ、例へば適當なる矯正術を受け、コルセットを用ひ尙自由に歩行の出來るものは、新鮮なる空氣中に生活して、肺結核の條下に述べたところを参照し身軀の強壯を計らねばならぬ、

何れの種類にても脊髓の疾患に於て麻痺状態に陥り、永時日就床するの止むなきに至つた場合には、患者の體質を強健にし、衰弱せる筋肉を強からしめねばならぬのであるが、安静臥褥せるものは、動もすれば脂肪の沈着を來し、脂肪質なる傾きのあるものであるから、此點に注意して食物を撰定せねばならぬ、故に餘り脂肪に富めるものは與へぬ様に植物性食品も時によりては制限を加へ、飲料も餘り多く與へてはならぬ、然し又一方で衰弱し易き場合もあつて、疲羸骨立して容易に褥瘡が起り、其褥瘡がなかなか治癒し難き場合もあるから、常に十分なる食物を與へて營養を保持するといふことを念頭から離してはなりませぬ、

起居の不自由なるものは、常に清潔を怠つてはならぬといふことは論を俟たず、

第七 末梢神経の病氣

一般の食養生の原則を守つて養生したらよいのであるが、一つ老婆心を以て注意して置きたいのは多發性神経炎である、種々なる細菌の毒素に因つて起ることもあるが、又酒精飲

料、鉛中毒等中毒に因つても來ることがあるから、鉛を含んで居る白粉などは顔にでもつけぬがよい、又料理をする鍋其他の器物にでも鉛分を含んだ珪礫などの掛つて居るものはなきやと注意して貰はねばならぬ、又本病の治療中は勿論豫防上にも酒精飲料を除くやうにせねばならぬ、假令酒客であつても適當なる方法を講じて、次第に其用量を減じ、遂には酒精を用ひぬとも事足るといふ様にせねばならぬ、強き香味料を用ひてはならぬのは無論である、

附録 ベセドウ氏病

本病にあつては眼球突出、心悸亢進、四肢振顫が起り、前頸部にある甲状腺が腫大し、脈が數多くなり、汗が出で易く、神經過敏となり、其他種々の神經症狀の起るものであつて其原因は或は神經の變調に基くといはれ、或は血管の病氣であるといはれ、或は又甲状腺の働きが過度になり、甲状腺内で製造せられる物質が餘り多くなつて、血液中を巡環する爲に、血管系統の變調や、神經系統の變調を來すものであるともいはれて居る、此第三の説が近來學者間に割合勢力を占めてきた、

予が先年獨逸國ハルレ大學を參觀した時に、内科長のスツチンゲン氏が語された、動物に手術を施して其甲状腺を取除いたならば、甲状腺悪液質に罹つて、其動物の血液中には

甲状腺の製造する物質の缺亡が起る、若し斯る動物より血清を作つて、之をベセドウ氏病に用ひて効能があるといふことが眞實であるならば、斯る動物の乳汁は其材料を血液から取つて居るのであるから、同じく効能があるであらうといはれた、予は此點を實驗して見たいと心掛けて居つたが、明治四十年頃より或篤志の本病患者を治療する機會を得て、幸ひに今日迄引續いて實驗を行ふことが出来て居る、初は既に乳汁を分泌して居る羊の甲状腺を摘出したが、乳汁の分泌は短時日にして甚しく減じた、そこで妊娠中の羊に此手術を施したが時としては流産するものもあり、又都合よく分娩しても動物が小さいから分泌する乳汁の分量も多くない、そこで該患者は今日では妊娠せる牝牛に此手術を施して、分娩の後に出る牛乳を用ひ、其牛乳の分泌が減じかける前より、次の牝牛に手術を施すといふ様にして、乳汁を常に割合に多量に飲用して居る、今日では該患者の眼球は餘り人目にたぬ、心悸亢進も餘り覺ねぬ、四肢の振顫は殆んど起らず、神經過敏も餘程減じた、此患者には甲状腺は始めから餘り増大しては居らなかつた、現今本病の遺殘の症候は普通人よりも稍脈數が多いといふ位であるから、既往症を聞かなければベセドウ氏病があるといふことは殆んど見出すことが出来ぬ、

斯くの如き次第であるからベセドウ氏病には、此治療法を廣く試用せられむことを世の學

者に希望するのである、

本病に犯されたるものは虚弱なものが多く、且神経質となるものが少なくない、又肺結核に罹るものも間々ある、心臓も衰弱することもあるのであるから、上述の甲状腺を摘出した動物の乳汁を用ふる以外に、消化し易き味佳き混合性の食品を種々献立を換へて應用せねばならぬ、

予は又單純なる甲状腺腫に因つて氣管が壓迫せられ、呼吸促進を起すのに上述の乳汁を試用せしめて見たが、症候の輕快するを認めて喜んで居るものがある、但し尙ほ短時日を経過したのみであるから、其果して効驗あるや、否やは今此處に明言することは出来ぬ、此患者は飼犬を伴ふて散歩に出で、犬に曳かれて呼吸速迫を感じて居つたが、今は心悸亢進も呼吸速迫も起らず、却て犬を曳き廻して何の事もない位であると言つて居る、

第十節 老病

遺傳や家族歴を調べる時、又は世間話の時に五十歳で老病で死んだとか、五十五歳で老衰で死んだとか言ふことを數々聞くのであるが、如何に早老の日本人であつた處が五十歳や六十歳で老衰の來るといふことは少い、無論營養不給のものや、過度に肉體精神勞役した

ものには、此の位の年輩でも老衰が來ることはある、然し世人の所謂老衰といふものの中には命名すべきだけの疾病が見落され居るものが少くはなからうと思ふ、就中大體に診察をして何れの臓器にも格別の變化を認めぬといふものに、萎縮腎の見落されて居るものが少くないことは、腎臓炎の條下で已に述べた通りである、であるから假令六十歳七十歳以上の老體を診察するにあつても、充分に綿密に検査を施して貰はねばならぬ、そこで肉體には何等の變化が認められぬ場合であつても、猶色々注意して貰はねばならぬことがある、

諺に「健康の身體に健康の精神宿る」と云ふことは誰人も知つて居る處であるが、健康の精神より健康の肉體生ずといふことが、より以上に大切なるものであるといふことを第一に心得て貰はねばならぬ、精神が肉體を引き立て、肉體が精神を引立て、相巡還して眞の健康をなすものであつて、天職あることを自覺し、一の信念あり、趣味を有するものにして一日生長ゆれば一日の勤あり、一日の勤を果せば其夜は靜に安息し、翌日は又翌日の勤を爲さんとするものは、猶此世に入用なる人間である、凡て「用あるものは存し用なきものは亡ぶ」といふことは自然淘汰の原則である、故に苟くも長生せんと欲するものは此覺悟がなければならぬ、

假令功成り、名を就け家富み、子孫榮へ自ら稱して最早世に用なきものと云ふて居るものにも、猶其日其日の勤あることを忘れしめてはならぬ、天の賜りたる壽命は一日も長く保たし、一日も多く楽しむは天に對する勤である、一日も長く生き一日も多く活動するのは、子孫に手本を示すもので、子孫も亦斯の如く長く生存し、斯の如く活動することを得るものなりとの信念を子孫に遺すは、子孫に對する勤である、假令病床にあつて氣力衰へたるものに對しても、此の言葉を以て慰めたならば、随分元氣を引き立てることが出来るのである、

世間に子や孫を先立て、苦勞の中に餘儀なく働いて居り、充分の攝生も出来ずして長生きするものがあり、富貴安逸にして何事の望みも叶ひ、ヤレヤレと安心した者に早く死ぬるものもある、此の道理より考へれば更に不思議はない、世間には老人夫婦が揃ふて相應に違者で居るものが少くない、之は婆さんですらあのとうりである、自分にも之に劣る理由がない、と爺さんが想う様に婆さんも亦爺さんを互に見習ふて居るのである、即ち氣の張合で互に生き長らへて居るのであるが、一方が缺ぐれば他の一方も跡を追ふといふことが珍らしくないのは、氣の張りあいがあるからである、世間には又老人夫婦の一方が死ぬれば、其配遇は多くは三年の内に死ぬると云ふ云ひ習は

しがあるのは、此の道理であつて、其三年を過ぎれば又長生きするといはれて居るのも、一旦張合が抜けかけても肉體が打ち勝ち得たらば、死ななかつたといふ喜と、不安の念の去りしことと、猶ほ長生きが出来るであるといふ信念とが、新しく勢力を生ぜしむるからである、

高僧善智識といはれるものが、何月何日に死ぬると豫言して、果して其時に死ぬるものが稀でない、世人は之を以て高僧善智識たる所以として、一つの不思議の様に心得て居るが予の見る處では何等の不思議はない、何月何日迄は生き得られるといふ信念、即ち精神の張合ひといふ支柱が、其期日に至りて取り除かれるのであるから、肉體の仆れるのである同じ道理でよく病褥にある老人が自分の死期をいひあてる、否云ひあはすことのあるものである、

故に予は常に肉體の養生と精神の養生とを兼ね供へざれば、眞の養生の道に叶はざるものであると唱へて居る、此心掛を以て病床に臨んで患者の世話をせねばならん、

世間には病症は左程ではありませんが御齡が御齡であるから御用心なさいと告げる醫者がある、醫者が用心して手くばりをしてやらなくて、病人や家族に何が出来るものである、斯の如きことを云つて家族や病人の氣力を落さしむるのは治療家といはれるであろう

歟、予は老年の病人の前では其年齢といふことを禁句として居るのみならず、年齢のことをわけて心細がる者には寧ろ三十歳の老人あり、七十歳の三ツ子ありといふて慰める、更に年齢の高き者の話をする、

氣の張合といふことは如斯大切なるものであるが、醫者が如何に骨を折つても病人がそれにつれて來なければ病氣は治るものでない、病人と醫者と氣合があわねば功績はあがらぬのであるといふて綾々病床にあるものの心得べきことを諭すのである、即ち醫師に對して義務的にでも氣の張を保たしめることもある、

病人の氣の張りや、病人と醫者と氣合ひの一致することやが、病氣の治癒に甚だ大切なことを示す爲に、予が電報で老病を治癒させた例を揚やう、

先年大和の中市で七十餘歳の一老女を診察した、動脈硬變があつて、心臓衰弱を起した結果、藥品も食物も嘔吐して下し、尿は出でず、下肢に浮腫があり、肺にも水腫が起つて居て、應答も出來ぬもので老衰であるから一週間も難かしい年齢にも不足はあるまいと宣生せられて居つた患者である、予は患者に向つて「お婆さん死に度いか、葉は落ち、枝は枯れ、根は萎みかけて居ると同じであるから、二三日の中には死ねる、後生を願つて居るがよい」更に患者の耳に口を近づけ「それとも生き度いか、生きたいならば醫者に骨を折る

す丈ではないかぬ、自分も石に咬ぢりついても助からうと動めねばならぬ、思案をして置き」を告げ、別室で主任醫家族等にそれぞれ指圖をして、歸るに望み更に患者の側に至り「お婆さん如何しても癒らねばならぬことに評定が決つたのだから、苦しうても辛抱して全快して、大阪へも出てくる様にならねばならぬぞ」と別れを告げた、其の翌日長文の電報で予の指定した藥品を興へると嘔吐して甚だ敷く苦むが、夫でもあの藥を興へねばならぬかと問ふて來た、予は直に「シニタケレバクスリヤメ」と返電した、二日程たつて同じく長文の電報で患者の苦痛を訴へて來た、予は前と同文の返電を送つた、ところが此患者は一ヶ月程して全快して、四五年間も生き延びた、後日患者が他人に物語つたことが甚だ味がある、あの時には他人の話も次第に遠くなる様に思はれた、喰べるものも納まらず、死んで行き居るのであると思つた、同じ死ぬるならば納まらぬものを食して苦しむよりは、ジツと死を待つがよいと思つて居たが、松本先生の聲が耳に響いてまだ死んで居るのではない、のみならず生き様と思へば生きられると聞いて、生きられるならば假令嘔くとも薬も飲まう、苦しくとも食物を食べやうといふ氣になつたと云ふたこのことである、患者は後に一日の惱で亡くなつたと聞いた、

興味ある一例を付け加へやう、大阪に於て予が親しく診察した七十五歳の一老女で、怪き

喘息と微菌尿の外には別に病變はなかつた、診療をして居る間に次第に衰弱して大小便の出づるのも分らなくなり、食慾も全く落ちた、然し予は食物さね食べて呉れたらば、もう一度は助けて見ると言つた、家族が病人に色々尋ねた處が、スシが喰べたいと云うた予は之を許したが而し同時にスープを準備させて置いた、患者は一片のスシの極少量を口に入れたのみである、直に「お婆さんスシの様なもの喰べたのであるから、藥を召しあがらなければ毒になりまして云ふて、スープを進めた、これから順をつけ、藥である云ふて種々なる流動性の食品を進めて、遂に全快するに至らしめた、之はすしの如き不適當なものながら、之を用ひて食物に對する慾を呼び起した例である、慾望と云ふことも是非なければならぬものである、この患者は一年餘の後に心臓衰弱の結果この世を去られたが、この最後の病氣の経過は餘り長くはなかつたのである、予は又老年の病人に遺言を聞くのを頗る忌むのである、之は恰も死を宣告すると同一のもので、患者に氣力を落さしめることの最も甚だしいものである、止むを得ない場合には養生するものは心にかゝる事がありてはならぬものであるから、家政上の事でも何事でも、曰ふ可き事があるのならば、曰つて了ふて心の荷を下すがよいと諭して、遺言を曰はしめる事もあるが、之がために若し元氣を落し、萬一助かるやも知れぬものが死に至ることが

ありはすまいかと思へば、此の事は醫者の職務中で予の最も嫌ひとする所である、老病者の食物は無論その病症に應じて料理せねばならぬのであるが、假令格段なる病變なく單純の老衰にあつても、患者の消化器は甚だ衰へて居るものであるから、充分に消化し易き様流動性になし、且美味でなければならぬのみならず、假令よき飲食物にても千遍一律ならざる様、品物を取り換へることを怠りてはならぬ、老人は動もすれば片意地で、從來一度でも食した経験のあるものでなければ、拒まうとする傾きがあるが、病氣の時には病氣の時の様にせねばならぬ、其の時其の状態に最も適合したものが最良の方法である云ふことを懇々説き、誠實と親切を以て患者が醫師の導く所に従ふ様にせねばならぬ、食養生の各論は一先づ之を以て終りとする、此の書に述べざる所は他日機會を得て之を補ふ考へである、最後に世人に希望したきは、病人の見舞に菓子折なき飲食物を病室に持ち行くことを全廢したのである、或は香水とか、或は盆栽とか、或は書畫とか、病室に利用の出来るものを用ひる様にしたらさうであらう、尙病人を見舞つて病人と談話せざれば見舞をした様に思はぬ人がある様であるが、輕症な

る病人ならばいざ知らず、さもなくば成る可く遠慮したがよろしかるふ、病床にあるものは平生とは気分が異つてゐるから會ふのを好む人と嫌ふ人とある、又假令好む人と談話する位にても後に疲勞を來す事があるから、斯様な事は萬事豫め醫師より指圖を受けて置くがよからう、尙ほ又家族にても病人を抱へて外客に應接するは甚だ迷惑の時もあるから、名刺だけを差し出して直に去る方が反つて好意になる場合もあらうと思ふ、好意や禮儀を盡したいものは毎日行つて名刺を差し出しては如何、病人のために見舞に出るのであつて見舞に行く人のために見舞に出るのではないから、病人の不利益になる事をしてはならぬ振を見て自分の意志を通じて貰へば病人はその同情を大に喜ぶであらふ。



U1

大正三年三月一日印刷
大正三年三月十日發行

正價壹圓五拾錢

編輯者兼 松本百之助

發行者兼 植田熊太郎
大阪市東區伏見町四丁目十一番地

印刷所 輝文館印刷所
大阪市西區初北通三丁目卅八番地
電話土佐場二四二三番

發行所 輝文館
大阪市東區伏見町四丁目
電話本局二二九七番
振替口座大阪二六四番

ト工-3a-5

終

